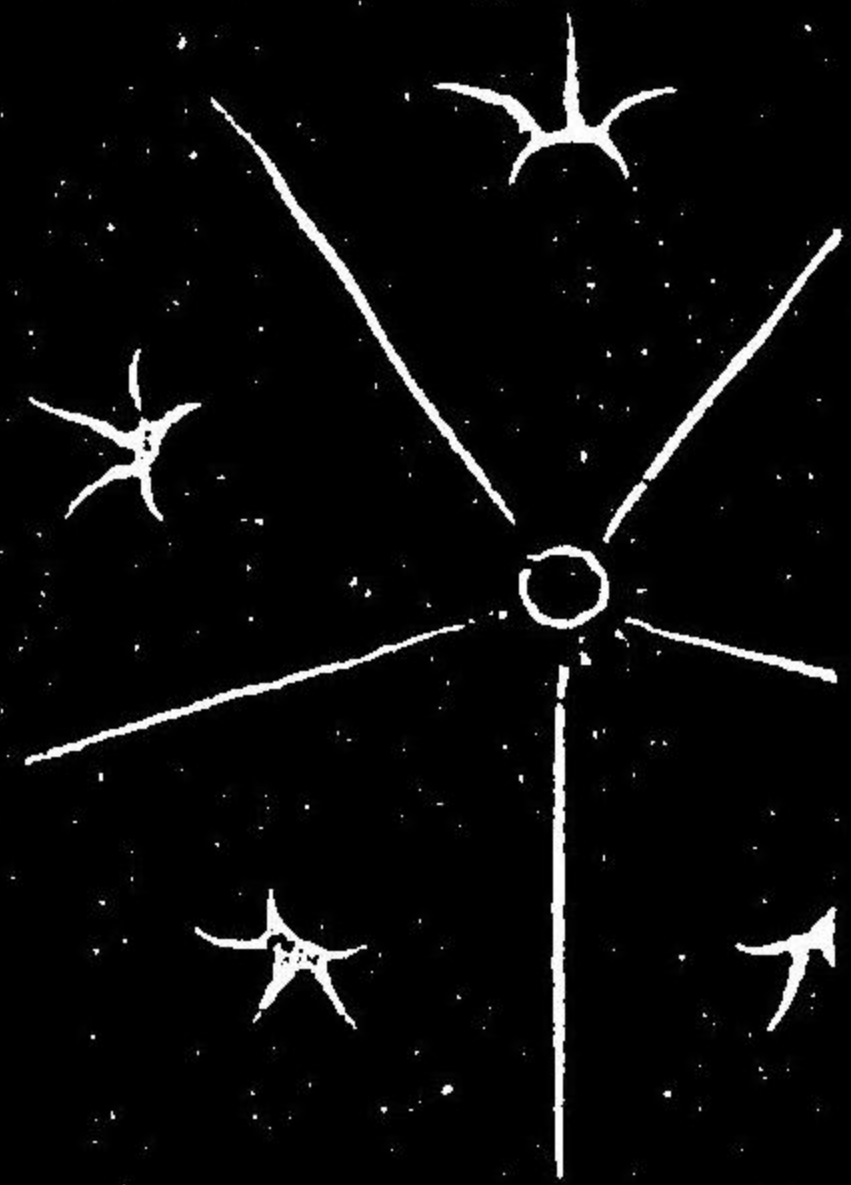
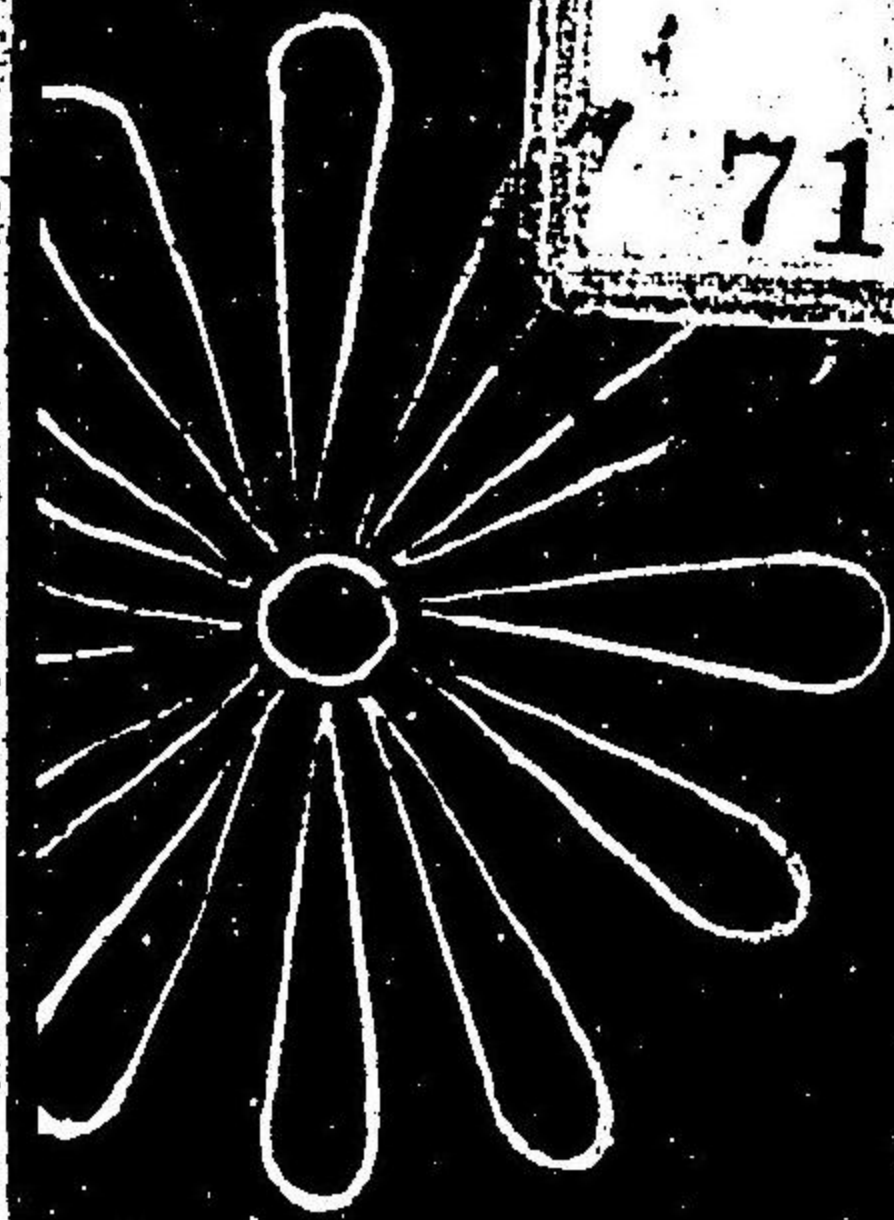


特 18

71

曹洞  
在家

日課要集



019673-000-6

特18-71

曹洞在家日課要集

松崎 覺本 / 編

M31.6

ABG-0465

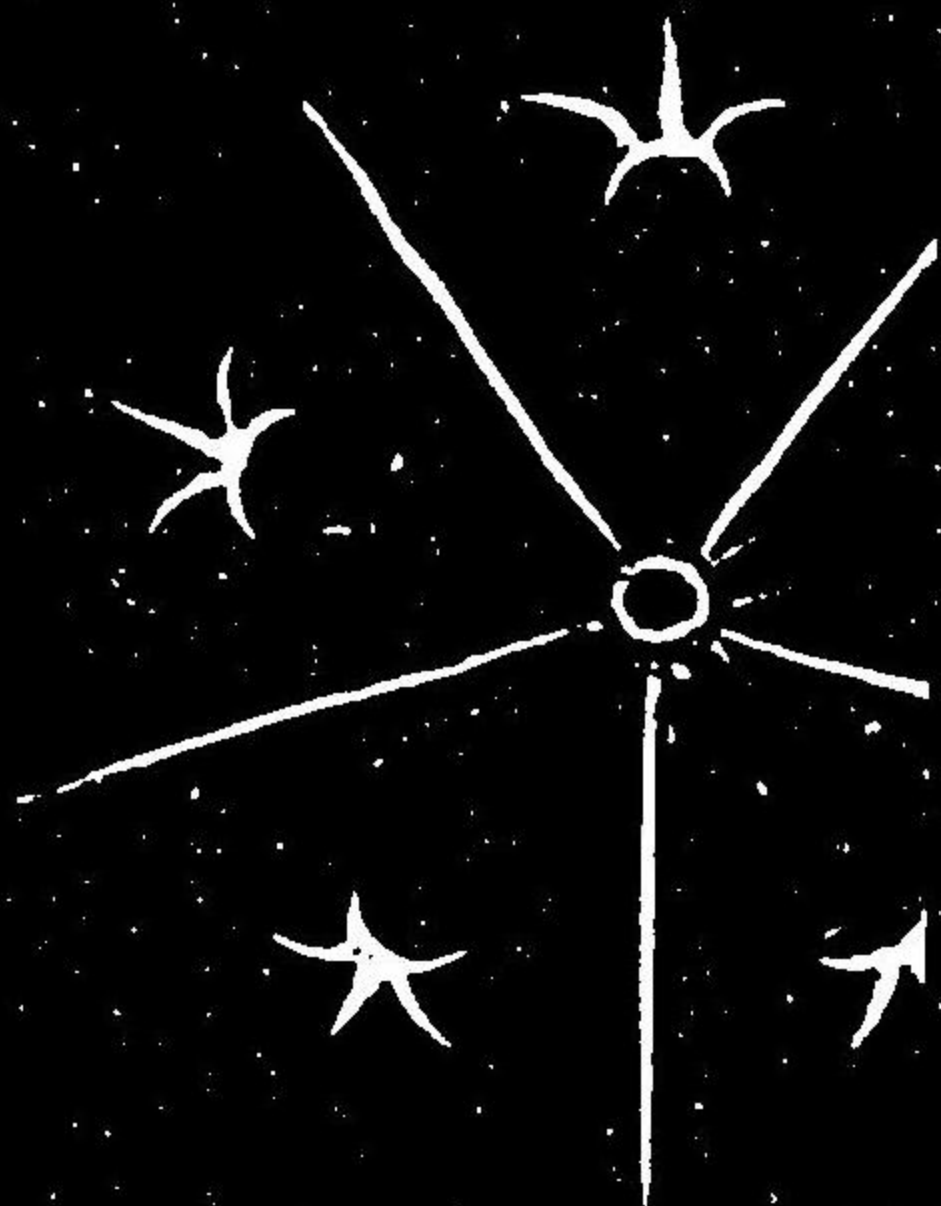
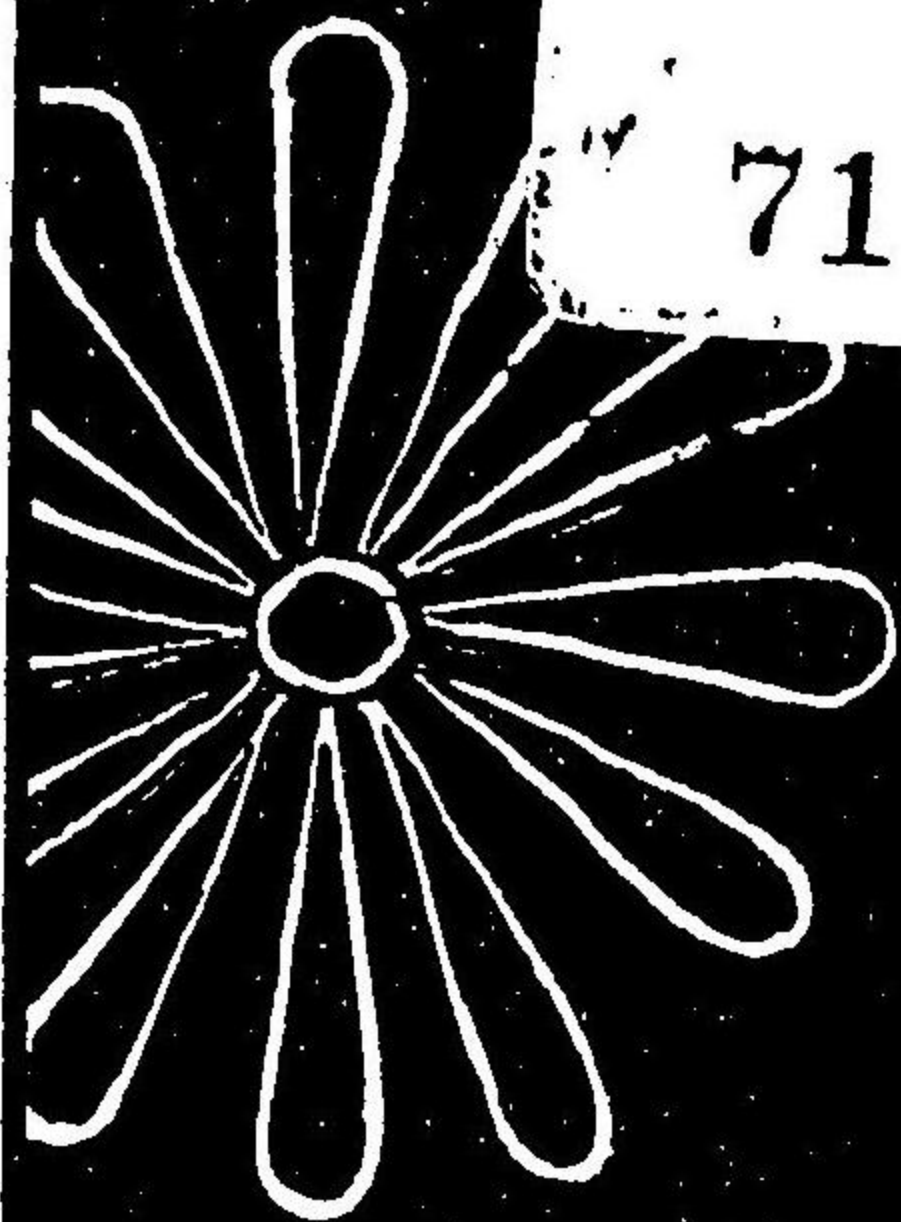


特 18

71

曹洞  
在家

日課要集



2024  
425

Handwritten text, possibly a signature or title, in a cursive style.

Large square seal impression with archaic Chinese characters.

Vertical seal impression with archaic Chinese characters.

Large, bold, black calligraphic characters, likely the name '李' (Li).

Large, bold, black calligraphic characters, likely the name '子' (Zi).

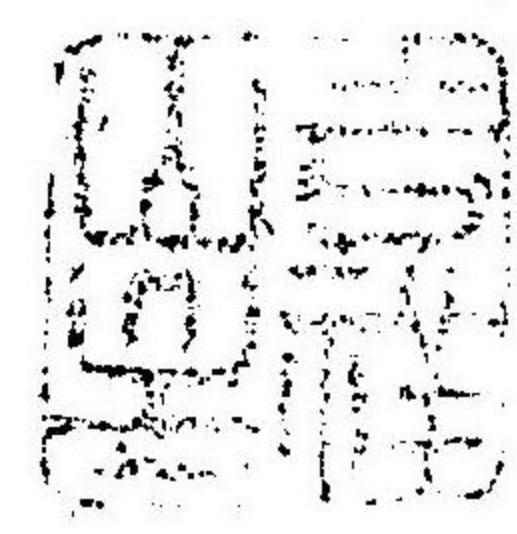
Circular seal impression with archaic Chinese characters.

永年行由



樂善堂  
名畫

永年行自



樂善為上



西申候秘  
法明七年二祀



序言

松崎天胤子、頃日曹洞在家日課要集を編述し來り、余に一言を弁せむを乞ふ、仍て之を見るに、日用諷經の外更に兩祖の略傳より、下吾人の信仰に至るまで、能く其の要を摘して一團圓を成したれば、之を檀信の戸戸に頒たん、蓋し其の出色の者たるを信ず、

抑も子の林内に於ける、俛焉學に勉め、時ありて筆を文壇に弄す、此編の如き亦其の餘に出づと云ふ、固より瑣事、敢て道ふべきに非ずと雖ども、余は寧ろ子の勉めて已まざる、實に其れ此の如くなるを嘉せずんばあらず、然れども、余は更に大方隅なく大器晚成なる日あらむ

を切望して已まざるなり、子其れ幸に旃を努めよ。

東都麻溪の一深林中に於て

明治三十年五月下浣 折居光輪誌

# 目次

## 第一段 日課諷經要目

### 第一節 朝課諷經

三歸戒 ● 般若心經 ● 消災咒 ● 回向

### 第二節 晚課諷經

懺悔文 ● 大悲咒 ● 舍利禮文 ● 普回向

付屬 觀音經 ● 心經(誦讀) ● 甘露門 ● 檀越諷經回向 ● 同年回

回向 ● 中陰忌名 ● 追善忌名

第二段 教會諷經要目

禮讚文 ● 觀音經(誦讀) ● 大悲咒(前出) ● 施食咒 ● 普回向 ● 開經偈 ● 準提讚同陀羅尼

第三段 曹洞教會修證義

第四段 洞上吾人之信仰

別錄

第一段 高祖承陽大師略傳

第二段 太祖圓明國師略傳

第三段 大本山永平寺略緣起

第四段 大本山總持寺略緣起

持18  
71

曹洞在家日課要集

第一段

日課諷經要目

第一節

朝課諷經

○三歸戒略文

(一拜毎に稱へて三拜すべし)

南無歸依佛。南無歸依法。南無歸依僧。

○摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。舍利子。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識亦



復如是。舍利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不增不減。  
是故空中。無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。  
無眼界。乃至無意識界。無無明。亦無無明盡。乃至無老死。亦無  
老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。以無所得故。菩提薩埵。依般  
若波羅密多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顛倒夢  
想。究竟涅槃。三世諸佛。依般若波羅密多故。得阿耨多羅三藐三  
菩提。故知般若波羅密多。是大神呪。是大明呪。是無上呪。是無  
等等呪。能除一切苦。眞實不虛。故說般若波羅密多呪。即說呪  
曰。  
羯諦羯諦。波羅羯諦。波羅僧羯諦。菩提娑婆訶。  
般若心經。

○消災妙吉祥陀羅尼 (三返)  
曩謨三滿多。母駄喃。阿鉢囉底。賀多舍。娑曇喃。怛姪他。唵。  
佉佉。佉佉佉。吽吽。入嚩囉。入嚩囉。縛羅入嚩囉。縛羅入嚩  
囉。底瑟吒。底瑟吒。瑟致哩。瑟致哩。娑發吒。娑發吒。扇底迦。  
室哩曳。娑婆訶。

○回向

上來虔で般若心經消災妙吉祥陀羅尼を誦誦す集むる所の功德  
は大恩教主本師釋迦牟尼佛、高祖佛性傳東國師承陽大師、太祖弘德  
圓明國師、盡十方世界一切の三寶に回向す、伏して願くは、四恩總て  
報じ、三有齊しく資け、法界の群生と同じく種智を圓にせんことを、  
次に冀くは、家道興隆、災障消除、諸縁吉祥ならんことを、

十方三世一切佛。諸尊菩薩摩訶薩。摩訶般若波羅密。

南無大恩教主本師釋迦牟尼佛。(一拜毎に唱へて三拜すべし但し又單に

南無釋迦牟尼佛と稱へ奉るも妨なし)

第二節

晚課諷經

懺悔文

我昔所造諸惡業。皆由無始貪瞋痴。從身口意之所生。一切我今皆懺悔。(一拜毎に唱へて三拜すべし)

大悲心陀羅尼

南無喝囉怛那。哆囉夜耶。南無阿唎耶。婆盧羯帝。爍鉢囉耶。菩  
提薩哆婆耶。摩訶薩哆婆耶。摩訶迦嚧尼迦耶。唵。薩皤囉罰曳。  
數怛那。怛寫。南無悉吉嚧。埤伊蒙。阿唎耶。婆盧吉帝。室佛  
囉。楞駄婆。南無那囉。謹墀醯唎。摩訶皤哆。沙咩薩婆。阿他豆  
輪朋。阿遊孕。薩婆薩哆。那摩婆伽。摩罰特豆。怛姪他。唵。阿

婆盧醯。盧迦帝。迦羅帝。夷醯唎摩訶。菩提薩埵。薩婆薩婆。摩  
 囉摩囉。摩醯摩醯。唎多孕俱盧俱盧。羯蒙度盧度盧。罰闍耶帝。  
 摩訶罰闍耶帝。陀羅陀羅。地唎尼。室佛囉耶。遮囉遮囉。麼麼罰  
 摩囉。穆帝隸。伊醯伊醯。室那室那。阿囉唎佛囉舍利。罰沙罰  
 唎。佛囉舍耶。呼盧呼盧。摩囉呼盧呼盧。醯唎唎囉唎囉。悉唎悉  
 唎。蘇嚧蘇嚧。菩提夜菩提夜。菩駄夜菩駄夜。彌帝唎夜。那羅謹  
 墀。地唎瑟尼那。婆夜摩那。娑婆訶。悉陀夜。娑婆訶。摩訶悉陀  
 夜。娑婆訶。悉陀唎。室幡羅耶。娑婆訶。那羅謹墀。娑婆訶。  
 摩羅那羅。娑婆訶。悉囉僧阿穆佉耶。娑婆訶。娑婆摩訶悉陀夜。  
 娑婆訶。者吉囉阿悉陀夜。娑婆訶。波哆摩羯悉哆夜。娑婆訶。那  
 囉謹墀。幡伽囉耶。娑婆訶。摩婆利勝羯羅耶。娑婆訶。南無喝囉怛

那哆囉耶夜。南無阿唎哪。婆盧吉帝。爍幡囉夜。娑婆訶。悉殿都。  
 漫多囉。跋陀耶。娑婆訶。

○舍利禮文

一心頂禮。萬德圓滿。釋迦如來。身心舍利。本地法身。法界塔  
 婆。我等禮敬。爲我現身。入我我入。佛加持故。我證菩提。以佛  
 神力。利益衆生。發菩提心。修菩薩行。同入圓寂。平等大智。今  
 將頂禮

○普回向

願くは此功德を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に佛道  
 を成ぜんことを。

十方三世一切佛。諸尊菩薩摩訶薩。摩訶般若波羅密。

南無大恩教主本師釋迦牟尼佛。

(三稱三拜前に同じ)

附屬

○妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五

爾時、無量意菩薩、即從座起、偏袒右肩、合掌、向佛、而作是言、世尊、觀世音菩薩、以何因緣、名觀世音、佛告無量意菩薩、善男子、若有無量、百千萬億衆生、受諸苦惱、聞是觀世音菩薩、一心稱名、觀世音菩薩、即時觀其音聲、皆得解脫、

若有持是觀世音菩薩名者、設入大火、火不能燒、由是菩薩威神力故、若為大水所漂、稱其名號、即得淺處、若有百千萬億衆生、為求金銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、真珠等寶、入於大海、假使黑風、吹其船舫、飄墮羅刹鬼國、其中若有乃至一人稱觀世音菩薩名者、是諸人等、皆得解脫羅刹之難、以是因緣、名觀世音、

若復有人、臨當被害、稱觀世音菩薩名者、彼所執刀杖、尋段段壞、而得解脫、若有三千大千國土、滿中夜叉羅刹、欲來惱人、聞其稱觀世音菩薩名者、是諸惡鬼、尚不能

以惡眼視之、况復加害、

設復有人、若有罪、若無罪、枷械枷鎖、檢繫其身、稱觀世音菩薩名者、皆悉斷壞、即得解脫、若三千大千國土滿中、怨賊、有一商主、將諸商人、齎持重寶、經過險路、其中一人、作是唱言、諸善男子、勿得恐怖、汝等應當一心稱觀世音菩薩名號、是菩薩能以無畏、施於衆生、汝等若稱名者、於此怨賊、當得解脫、衆商人聞俱發聲言、南無觀世音菩薩、稱其名故、即得解脫、無量意、觀世音菩薩摩訶薩、威神之力巍巍如是、

若有衆生、多於姪欲、常念恭敬觀世音菩薩、便得離欲、若多瞋恚、常念恭敬觀世音菩薩、便得離瞋、若多愚癡、常念恭敬觀世音菩薩、便得離癡、無量意、觀世音菩薩、有如是等大威神力、多所饒益、是故衆生、常應心念、

若有女人、設欲求男、禮拜供養觀世音菩薩、便生福德智慧之男、設欲求女、便生端正有相之如、宿植德本、衆人愛敬、無量意、觀世音菩薩、有如是力、若有衆生、恭敬禮拜觀世音菩薩、福不唐捐、是故衆生、皆應受持觀世音菩薩名號、無量意、若有人、受

持六十 二億恒河沙菩薩名字、復盡形、供養飲食衣服臥具醫藥、於汝意云何、是善男子  
善女人、功德多不、無盡意言、甚多、世尊佛言、若復有人、受持觀世音菩薩名號、乃至一  
時禮拜供養、是二人福正等無異、於百千萬億劫、不可窮盡、無盡意、受持觀世音菩薩名  
號、得如是無量、無邊福德之利、

無盡意菩薩、白佛言、世尊、觀世音菩薩、云何遊此娑婆世界、云何而為衆生說法、方便  
之力、其事云何、佛告無盡意菩薩、善男子、若有國土衆生、應以佛身得度者、觀世音菩  
薩、即現佛身而為說法、應以辟支佛身得度者、即現辟支佛身而為說法、應以聲聞身得  
度者、即現聲聞身而為說法、應以梵王身得度者、即現梵王身而為說法、應以帝釋身得  
度者、即現帝釋身而為說法、應以自在天身得度者、即現自在天身而為說法、應以大自在  
天身得度者、即現大自在天身而為說法、應以天大將軍身得度者、即現天大將軍身而為  
說法、應以毘沙門身得度者、即現毘沙門身而為說法、應以小王身得度者、即現小王身而  
為說法、應以長者身得度者、即現長者身而為說法、應以居士身得度者、即現居士身而  
為說法、應以宰官身得度者、即現宰官身而為說法、應以婆羅門身得度者、即現婆羅門

身而為說法、應以比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、身得度者、即現比丘、比丘尼、優婆塞、優  
婆夷、身而為說法、應以長者、居士、宰官、婆羅門、婦女身得度者、即現婦女身而為說法  
應以童男、童女、身得度者、即現童男童女身而為說法、應以天龍、夜叉、乾闥婆、阿修  
羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等身得度者、即皆現之而為說法、應以執金剛神得  
度者、即現執金剛神而為說法、無盡意、是觀世音菩薩、成就如是功德、以種種形、遊諸  
國土、度脫衆生、是故汝等、應當一心供養觀世音菩薩、是觀世音菩薩摩訶薩、於怖畏  
急難之中、能施無畏、是故此娑婆世界、皆號之為施無畏者、無盡意菩薩白佛言、世尊、  
我今當供養觀世音菩薩、即解頸衆寶珠瓔珞、價直百千兩金、而以與之作是言、仁者  
受此法施、珍寶瓔珞、時觀世音菩薩、不肯受之、無盡意復白觀世音菩薩言、仁者、我今當  
故、受此瓔珞、爾時佛告觀世音菩薩、當愍此無盡意菩薩、及四衆、天龍、夜叉、乾闥婆、  
阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等故、受是瓔珞、即時觀世音菩薩、愍諸四衆、  
及於天龍、人非人等、受其瓔珞、分作二分、一分奉釋迦牟尼佛、一分奉多寶佛塔、無盡  
意、觀世音菩薩、有如是自在神力、遊於娑婆世界、爾時無盡意菩薩、以偈問曰、

（以下世尊經）

世尊妙相具、我今重問彼、佛子何因緣、名爲觀世音、具足妙相尊、偈答無盡意、汝聽觀音  
行、善應諸方所、弘誓深如海、歷劫不思議、侍多千億佛、發大清淨願、我爲汝略說、聞  
名、及見身、心念不空過、能滅諸有苦、假使與害意、推落大火坑、念彼觀音力、火坑變成  
池、或漂流巨海、龍魚諸鬼難、念彼觀音力、波浪不能沒、或在須彌峰、爲人所推墮、念彼  
觀音力、如日虚空住、或被惡人逐、墮落金剛山、念彼觀音力、不能損一毛、或值怨賊繞、  
各執刀加害、念彼觀音力、咸即起慈心、或遭王難苦、臨刑欲壽終、念彼觀音力、刀尋段  
段壞、或因禁枷鎖、手足被杻械、念彼觀音力、釋然得解脫、咒詛諸毒藥、所欲害身者、念彼  
觀音力、還著於本人、或遇惡羅刹、毒龍諸鬼等、念彼觀音力、時悉不敢害、若惡獸圍繞、  
利牙爪可怖、念彼觀音力、疾走無邊方、魃蛇及蝮蝎、氣毒煙火然、念彼觀音力、尋聲自迴  
去、雲雷鼓掣電、降雹澍大雨、念彼觀音力、應時得消散、衆生彼困厄、無量苦逼身、觀音  
妙智力、能救世間苦、具足神通力、廣修智方便、十方諸國土、無刹不現身、種種諸惡趣、地  
獄鬼畜生、生老病死苦、以漸悉令滅、真觀清淨觀、廣大智慧觀、悲觀及慈觀、常

○摩訶般若波羅蜜多心經

願常瞻仰、無垢清淨光、慧日破諸闇、能伏炎風火、普明照世間、悲體戒雷震、慈意妙大  
雲、澍甘露法雨、滅除煩惱燄、證證經官處、怖畏軍陣中、念彼觀音力、衆怨悉退散、妙  
音觀世音、梵音海潮音、勝彼世間音、是故須常念、念念勿生疑、觀世音淨聖、於苦惱  
死厄、能爲作依怙、具一切功德、慈眼視衆生、福聚海無量、是故應頂禮、  
爾時持地菩薩、即從座起、前白佛言、世尊、若有衆生、聞是觀世音菩薩名、自在之業、  
普門示現神通力者、當知是人、功德不少、佛說是普門品時、衆中八萬四千衆生、皆發無  
等等阿耨多羅三藐三菩提心、

觀自在菩薩、深般若波羅蜜多、行時、五蘊皆空、空乃照見、一切の苦厄を度  
し玉ふ、舍利子、色は空に異ならず、空は色に異ならず、色即ち是れ空、空即ち是れ色、  
受想行識も亦復た是の如し、舍利子、是の諸法は空相にして、生ぜず、滅せず、垢つかず  
淨からず、増さず減らさず、是の故に、空中には色もなく、受想行識もなく、眼耳鼻舌身意  
もなく、色聲香味觸法もなく、眼界もなく、乃至意識界もなく、無明もなく、亦無明の

盡るともなく、乃至老死もなく、亦老死の盡るともなく、苦集滅道もなく、智もなく亦得もなし、所得なきを以ての故に菩提薩埵、般若波羅密多に依るが故に心聖礙なし、聖礙なきが故に恐怖あるとなし、一切の顛倒夢想を遠離して、涅槃を究竟す、三世諸佛、般若波羅密多に依るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得玉へり、かるが故に知る、般若波羅密多は、是れ大神咒なり、是れ大明咒なり、是れ無上咒なり、是れ無等等咒なり、能く一切の苦を除て、眞實にして虚ならず、かるが故に般若波羅密多の咒を説く、即ち咒を説て曰く、

辯諦羯諦。波羅羯諦。波羅僧羯諦。菩提娑婆訶。  
般若心經

○甘露門

○奉請三寶

南無十方佛。南無十方法。南無十方僧。南無本師釋迦牟尼佛。南無大慈大悲救苦觀世音菩薩。南無啓教阿難尊者。

○招請發願

是諸衆等。

發心して一器の淨食を奉持して、普く十方、窮盡虚空、周遍法界、微塵刹中、所有國土の一切の餓鬼に施す、先亡久遠、山川地主、乃至曠野の諸鬼神等、請ふ來て此に集れ、我今悲愍して、普く汝に食を施す、願くは汝各各、我此食を受けて、轉じて持て、盡虚空界の諸佛、及び聖一切の有情に供養して、汝と有情と、普く皆飽滿せむことを、亦願くは汝が身、此咒食に乗して、苦を離れて解脱し、天に生じて樂を受け、十方の淨土も、意に隨て遊往し、菩提心を發し、菩提道を行じ、當來に作佛して、永く退轉なく、前さ道を得る者は、誓て相度脱せんことを、又願くは汝等、晝夜恒常に、我を擁護して、我所願を滿せんことを、願くは此食を施す、所生の功德、普く以て法界の有情に廻施して、諸の有情と共に、平等共有ならん、諸の有情と共に、同く此福を以て、盡く將て眞如法界、無上菩提、一切智智に回向して、願くは速に成佛して、餘果を招くこと勿らむ、願くは此法に乗じて、疾く成佛することを得ん、

○雲集鬼神招請陀羅尼

雲集鬼神招請陀羅尼。迦哩多哩。恒他藥多也。

○破地嶽門開咽喉陀羅尼

破地嶽門開咽喉陀羅尼。唵。破地嶽門開咽喉陀羅尼。

○無量威德自在光明加持飲食陀羅尼

無量威德自在光明加持飲食陀羅尼。唵。無量威德自在光明加持飲食陀羅尼。

○蒙甘露法味陀羅尼

蒙甘露法味陀羅尼。唵。蒙甘露法味陀羅尼。蘇嚩嚩。鉢囉蘇嚩。鉢囉蘇嚩。沙婆訶。

○毘盧舍那一字心水輪觀陀羅尼

毘盧舍那一字心水輪觀陀羅尼。唵。毘盧舍那一字心水輪觀陀羅尼。

○毘盧舍那一字心水輪觀陀羅尼

毘盧舍那一字心水輪觀陀羅尼。唵。毘盧舍那一字心水輪觀陀羅尼。除慳貪業。福智。

○五如來寶號招請陀羅尼

五如來寶號招請陀羅尼。唵。五如來寶號招請陀羅尼。南無多寶如來。毘盧薄伽梵帝。鉢囉步多。囉怛曩也。恒他藥多也。除慳貪業。福智。

圓滿

南無妙色身如來。毘盧薄伽梵帝。蘇嚩嚩耶。恒他藥多也。破醜陋形。圓滿相好。

南無甘露王如來。毘盧薄伽梵帝。阿密唎帝。囉惹耶。恒他藥多耶。灌法身心。令受快樂。

南無廣博身如來。毘盧薄伽梵帝。尾布邏藥。恒羅耶。恒他藥多也。咽喉廣大。飲食充飽。

南無離怖畏如來。毘盧薄伽梵帝。阿婆演。迦羅耶。恒他藥多耶。恐怖悉除。離餓鬼趣。

發菩提心陀羅尼。唵。發菩提心陀羅尼。母怛波那野迷。

授菩薩三摩耶戒陀羅尼。唵。授菩薩三摩耶戒陀羅尼。

大寶樓閣善住秘密陀羅尼。唵。大寶樓閣善住秘密陀羅尼。

三昧耶。薩坦銀。

三昧耶。薩坦銀。

三昧耶。薩坦銀。



曇莫。薩嚩怛他莫多南。唵。尾補攞。藥陸。麼拏鉢羅陸。怛他多儂捺捨寧。摩拏摩  
拏。蘇鉢囉陸。尾麼黎娑藥囉。儼鼻嚩。吽吽。入嚩攞入嚩攞。沒駄尾盧枳帝。虞咽夜  
地瑟耻多。孽陸娑縛訶。唵麼拏。嚩日哩。吽。  
唵麼拏駄哩。吽吽吽。

○諸佛光明眞言灌頂陀羅尼

唵。阿暮伽。廢嚩耆娜。摩訶吠捺囉。麼拏鉢頭麼。入嚩攞。跋攞義利。鞞野吽。

○撥遣解脫陀羅尼

唵。嚩日囉。目乞灑穆。

○檀越諷經回向

仰ぎ冀くは三寶。俯して照鑒を垂れ玉へ。

上來(經名)を諷誦す、集むる所の功德は、(法名)家門先亡累代精靈、六親眷屬七世  
の父母、有緣無緣三界の萬靈、法界の合識等に回向す、伏して願くは、曠劫の無明は當  
下に消滅し、真空の妙智即ち現前することを得、頓に無生を悟て、速に佛果を證せん

とを

○同年回回向

淨極り光通達し。寂照にして虚空を含ひ。却來して世間を觀すれば。猶し夢中の  
事の如し。

仰ぎ 希くは三寶。俯して照鑒を垂れ玉へ。

家門本月(來日)伏して、(法名)(忌號)忌の辰に値て、虔で香華燈燭 茶菓珍膳を備へ以  
て供養を伸ぶ、謹で現前の清衆を請して(經名)經を諷誦す、集むる所の功德は、覺  
靈を資助し、報地を莊嚴す、伏して、願くは、生死の流れに處して驪珠獨り滄海に耀き、  
涅槃の岸に踞して桂輪孤り碧天に朗かに、普く世間を導て、同く覺路に登らんこと  
を。

○中陰忌名

三日…開蓮忌。初七日…初願忌。二七日…以芳忌。三七日…洒水忌。四七日…阿  
經忌。五七日…小練忌。六七日…檀弘忌。七七日…大練忌。

○追善忌名

百箇日：卒哭忌。一周忌：小祥忌。三周忌：大祥忌。七周忌：休廣忌。十三年忌：遠芳忌。十七年忌：慈明忌。廿三年忌：大士忌。卅三年忌：清淨本然忌。五十年忌：半百回忌。百年忌：一百回忌。

第二段

教會諷經

○歸敬式禮讚文

自歸依佛。	當願衆生。	體解大道。	發無上心。	一拜
自歸依法。	當願衆生。	深入經藏。	智慧如海。	一拜
自歸依僧。	當願衆生。	統理大衆。	一切無礙。	一拜(合三拜)

○妙法蓮華經觀世音菩薩普門品

爾の時に無盡意菩薩、即ち座より起て、偏に右の肩を袒き、掌を合せ、佛に向ひ奉て、是の言をなとく、世尊、觀世音菩薩は何の因縁を以て、觀世音と名く、佛、無盡意菩薩に告ての玉はく、善男子、若し無

量百千萬億の衆生有て、諸の苦惱を受けんに、是の觀世音菩薩を聞て一心に稱名せば、觀世音菩薩、即時に其の音聲を觀じて、皆解脱することを得ん。

若し是の觀世音菩薩の名を持つる者あらば、設ひ大火に入るとも、火も焼くこと能はず、是の菩薩の威神力に由るが故に、若し大水の爲に漂はさるゝも、其の名號を稱せば、即ち淺き處を得ん。

若し百千萬億の衆生有て、金銀、瑠璃、砗磲、碼碯、珊瑚、琥珀、眞珠、等の寶を求めんが爲に大海に入らんに、假ひ黑風其の船舫を吹て、羅刹鬼國に飄ひ墮ちんに、其中若し乃至一人も觀世音菩薩の名を稱ふる者あらば、是の諸人等、皆羅刹の難を解脱することを得ん、是の因縁を以て、觀世音と名く。

若し復た人有て當に害せらるべきに臨て、觀世音菩薩の名を稱せば、彼の執る所の刀杖、尋で段段に壞れて、解脱することを得ん。

若し三千大千國土の中に滿る夜叉羅刹來て人を惱まさんと欲せんに、其の觀世音菩薩の名を稱する者を聞らば、是の諸の惡鬼、尙ほ惡眼を以て之を視ること能はず、況や復た害を加へんをや。

設ひ復た人有て、若くは罪あり、若くは罪なきも、枷械枷鎖、其の身を檢繫せんに、觀世音菩薩の名を稱せば、皆悉く斷壞して、即ち解脱することを得ん。

若し三千大千國土の中に滿る怨賊、ひとりの商人の主有て、諸の商人を將おて、重寶を齎み持て、險路を經過ぎんに、其中一人、是の唱言を作さく、諸の善男子、恐れ怖るゝことを得ること勿れ、汝ら當に

一心に觀世音菩薩の名號を稱すべし、是の菩薩は能く無畏を以て衆生に施し玉ふ、汝等若し名を稱せば、此の怨賊に於て當に解脱することを得べし、衆の商人聞て俱に聲を發して言さく、南無觀世音菩薩と、其の名を稱するが故に即ち解脱することを得ん、無盡意、觀世音菩薩摩訶薩は、威神の力ら巍巍たること、是の如き、若し衆生有て姪欲多あらんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば、便ち欲を離ることを得ん、若し瞋恚多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば、便ち瞋を離ることを得ん、若し愚痴多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば、便ち瞋を離ることを得ん、若し愚痴多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば、便ち痴を離ることを得ん、無盡意、觀世音菩薩は是の如き等の大威神力有て、饒益する所多き、是の故に衆生常に心に念すべし、

若し女人有て、設ひ男を求めんと欲して觀世音菩薩を禮拜供養せば、便ち福德智慧の男を生まん、設ひ女を求めんと欲せば、便ち端正有相の女を生まん、宿し徳本を植て、衆人に愛敬せらる、無盡意、觀世音菩薩は是の如きの力有り、若し衆生有て觀世音菩薩を恭敬禮拜せば、福唐捐せず、

是の故に衆生皆應に觀世音菩薩の名號を受持すべし、無盡意、若し人有て六十二億恒河沙の菩薩の名字を受持し、復た形を盡すまで飲食衣服、臥具、醫藥を供養せん、汝が意に於て云何ん、是の善男子、善女人の功德多きや不や、無盡意の言く、甚だ多し、世尊佛の玉へく、若し復た人有て觀世音菩薩の名號を受持し、乃至一時も禮拜供養せば、是の二人の福は正に等しうして異なることなし、百千萬億

劫に於ても窮め盡すべからず、無盡意、觀世音菩薩の名號を受持せ  
 へ、是の如き無量無邊の福德の利を得ん、  
 無盡意菩薩佛に白して言さく、世尊觀世音菩薩は、云何してか此の  
 娑婆世界に遊び玉ひ云何してか衆生の爲に說法し玉ふ、方便の力  
 其の事云何ん、佛、無盡意菩薩に告ての玉は、善男子、若し國土の衆  
 生有て、佛身を以て得度すべき者には、觀世音菩薩、即ち佛身を現じ  
 て爲に說法し、辟支佛身を以て得度すべき者には、即ち辟支佛身を  
 現して爲に說法し、聲聞身を以て得度すべき者には、即ち聲聞身を  
 現して爲に說法し、梵王身を以て得度すべき者には、即ち梵王身を  
 現じて爲に說法し、帝釋身を以て得度すべき者には、即ち帝釋身を  
 現じて爲に說法し、自在天身を以て得度すべき者には、即ち自在天

身を現じて爲に說法し、自在天身を以て得度すべき者には、即ち  
 大自在天身を現して爲に說法し、天大將軍身を以て得度すべき者  
 には、即ち天大將軍身を現じて爲に說法し、毗沙門身を以て得度す  
 べき者には、即ち毗沙門身を現じて爲に說法し、小王身を以て得度  
 すべき者には、即ち小王身を現じて爲に說法し、長者身を以て得度  
 すべき者には、即ち長者身を現じて爲に說法し、居士身を以て得度  
 すべき者には、即ち居士身を現じて爲に說法し、宰官身を以て得度  
 すべき者には、即ち宰官身を現じて爲に說法し、婆羅門身を以て得  
 度すべき者には、即ち婆羅門身を現じて爲に說法し、比丘比丘尼優  
 婆塞、優婆夷身を以て得度すべき者には、即ち比丘比丘尼優婆塞、  
 優婆夷身を現じて爲に說法し、長者居士宰官婆羅門の婦女身を

以て得度すべき者に、即ち婦女身を現じて爲に説法し、童男童女身を以て得度すべき者に、即ち童男童女身を現じて爲に説法し、天龍夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等身を以て得度すべき者に、即ち皆之を現じて爲に説法し、執金剛神を以て得度すべき者には、即ち執金剛神を現じて爲に説法す、無盡意、是の觀世音菩薩は、是の如きの功德を成就して、種種の形を以て諸の國土に遊び、衆生を度脱し玉ふ、是の故に汝等當に一心に觀世音菩薩を供養し奉るべし、是の觀世音菩薩は、怖畏急難の中に於て、能く無畏を施し玉ふ、是の故に此の娑婆世界、皆之を號して施無畏者と爲す、無盡意菩薩、佛に白して言さく、世尊、我れ今當に觀世音菩薩を供養し奉るべし、即ち頸の衆の寶珠の瓔珞の價ひ百千兩金なるを

解て、以て之を與へて是の言を作さく、仁者、此の法施の珍寶瓔珞を受け玉へ、時に觀世音菩薩肯て之を受け玉はず、無盡意復た觀世音菩薩に白うして言さく、仁者、我等を愍むが故に、此の瓔珞を受け玉へ、爾の時に佛觀世音菩薩に告ての玉はく、當に此の無盡意菩薩、及び四衆、天龍、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等を愍むが故に、是の瓔珞を受くべし、即時に觀世音菩薩、諸の四衆及び天龍人非人等を愍て、其の瓔珞を受けて、分て二分と作し、一分は釋迦牟尼佛に奉り、一分は多寶佛塔に奉る、無盡意、觀世音菩薩は、是の如きの自在神力有て、娑婆世界に遊び玉ふ、爾の時に無盡意菩薩、偈を以て問て曰く、(以下世尊經) 世尊妙相を具し玉ふ、我れ今重ねて彼を問ひ奉る、佛子、何の因縁を

以てか名づけて觀世音と爲す、具足妙相尊、偈を以て無盡意に答へ玉はく、汝ち聽け、觀音の行は善く、諸の方所に應じて、弘誓の深きことと海の如し、歷劫にも思議せられず、多の千億の佛に侍へて、大清淨の願を發せり、我れ汝が爲に略して説かん、名を聞き及び身を見、心に念じて空しく過さずんば能く諸有の苦を滅し玉ふ、假ひ害意を興して、大火坑に推し落されんにも、彼の觀音の力を念ずれば、火坑變じて池と成らん、或ハ巨海に漂ひ流れて、龍魚諸の鬼難あらんにも、彼の觀音の力を念ずれば、波浪も没むること能はず、或は須彌の峰に在て、人の爲に推し墮されんにも、彼の觀音の力を念ずれば、日の如くにして虚空に住せん、

或は惡人に逐はれて金剛山より墮ち落ちんにも、彼の觀音の力を念ずれば、一毛をも損すること能はず、或は怨賊の繞んで、各刀を執て害を加ふるに値ふとも、彼の觀音の力を念ずれば、咸く即ち慈心を起さん、或ハ王難の苦に遭ひ、刑に臨んで壽終らんと欲するも、彼の觀音の力を念ずれば、刀尋で段段に壞れん、或は囚へられて枷鎖に禁ぜられ、手足犴械せられんにも、彼の觀音の力を念ずれば、釋然として解脱することを得ん、咒詛諸の毒藥、身を害せんと欲する所の者も、彼觀音の力を念ずれば、還て本人に著らん、或は惡羅刹、毒龍諸の鬼等に遇はんにも、彼の觀音の力を念ずれば、

時に悉く敢て害せず、  
 若し悪獸に圍繞せられ、利き牙爪怖るべきも、彼の觀音の力を念ずれば、疾く無邊の方に走らん、  
 蛇及び蝮蠍氣毒焰火の如くに燃るも、彼の觀音の力を念ずれば、聲に尋て自ら廻り去らん、  
 雲雷鼓り掣電し、雹を降らし大雨を澍ぐも、彼の觀音の力を念ずれば、時に應おて消え散ることを得ん、  
 衆生困厄せられ、無量の苦身に逼るこも、觀音の妙智力は能く世間の苦を救ひ玉ふ、神通力を具足し、廣く智方便を修して、十方諸の國土、刹として身を現せず云ふことなし、種種諸の惡趣、地獄鬼畜生、生老病死の苦、以て漸く悉く滅せしむ、眞觀清淨觀、廣大智慧觀、悲

觀及び慈觀、常に願ひ常に瞻仰すべし、無垢清淨の光ありて、慧日諸の闇を破り、能く災の風火を伏して、普く明に世間を照し玉ふ、悲體戒雷の如くに震ひ、慈意妙に大なる雲の如し、甘露の法雨を澍て、煩惱の燄を滅除す、諍ひ訟へて官處を經、怖畏なる軍陣の中にも、彼の觀音の力を念ずれば、衆の怨悉く退散せん、

妙音觀世音、梵音海潮音、彼の世間の音に勝れり、是の故に須らく常に念ずべし、念念疑ひを生ずること勿れ、觀世音ハ淨聖にして、苦惱死厄に於て、能く爲に依怙と作り玉ふ、一切の功德を具し、慈眼以て衆生を視玉ふ、福壽の海無量なり、是の故に頂禮し奉るべし、  
 爾の時に持地菩薩、即ち座より起て前みて佛に白して言さく、世尊、若し衆生有て是の觀世音菩薩品自在の業、普門示現神通の力を聞



かん者は、當に知るべし是の人ハ功德少ならず、佛是の普門品を説き玉ひし時に、衆中八萬四千の衆生、皆無等等阿耨多羅三藐三菩提心を發しき、

○大悲心陀羅尼 (準前)

○施食神咒

若人欲了知。三世一切佛。應觀法界性。一切唯心造。南無十方佛。南無十方法。南無十方僧。南無本師釋迦牟尼佛。南無大慈大悲救苦觀世音菩薩。南無啓教阿難尊者。南無薩婆。怛多藥多。縛嚧枳帝。唵。三摩羅。三摩羅吽。南無蘇盧婆耶。怛多藥多耶。怛姪他。唵。蘇嚧蘇嚧婆耶。蘇嚧婆耶。蘇嚧娑婆訶。南無三曼多。沒馱南梵。

南無寶勝如來。南無多寶如來。南無妙色身如來。南無廣博身如來。南無離怖畏如來。南無甘露王如來。南無阿彌陀如來。南無阿彌陀婆耶。多陀伽哆耶。哆儻夜陀。阿彌唎。都婆毘。阿彌唎多。悉耽婆毘。阿彌唎多。毘伽蘭諦。阿彌唎哆。毘伽蘭哆。伽彌膩。伽伽那。枳多迦隸娑婆訶。神咒加持淨飲食。普施河沙衆鬼神。願皆飽滿捨慳心。悉脫幽冥生善道。歸依三寶發菩提。究竟得成無上覺。功德無邊盡未來。一切衆生同法食。汝等鬼神衆。我今施汝供此食。徧十方一切鬼神共。

以此修行衆善根。報答父母功勞德。存者福樂壽無窮。亡者離苦生安養。四恩三有諸含識。三途八難苦衆生。俱蒙悔過洗瑕疵。盡出

輪回生淨土

○普回向

願くは此功德を以つて、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に佛道を成ぜんことを、

十方三世一切佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅密。

○開經偈

無上甚深微妙法、百千萬劫難遭遇。我今見聞得受持、願解如來眞實義。

○龍樹菩薩準提讚曰

準提功德聚、寂靜にして心常に誦すれば、一切諸の大難、能く是の人を侵すこと無し、天上及び人間、福を受ること佛の如く等しく、此の

(但し具さには、龍樹菩薩讚、準提大明陀羅尼と讀むべし、)

如意珠に遇へば、必ひて無等等を得ん、

若し我れ誓願大悲の裡、一人として二世の願を成ぜずんば、我れ虚妄罪過の裏に墮して、本覺に歸らず大悲を捨てん、

曩謨颯多南、三藐三沒駄、俱胝南、怛囉也他、唵、者禮主禮、準提娑婆訶。

# 第三段

## 曹洞教會修證義

### 第一章

### 總序

生を明らめ死を明らむるは、佛家一大事の因縁なり、生死の中に佛あれば生死なし、但だ生死即ち涅槃と心得て、生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ぶべきもなし、是時初めて生死を離るゝ分あり、唯だ一大事因縁を究盡すべし、

人身得ること難し、佛法値ふこと希れなり、今我等宿善の助くるに依りて、既に受け難き人身を受けたるのみに非ず、遇ひ難き佛法に値ひ奉れり、生死の中の善生最勝の生なるべし、最勝の善身を徒ら

にして露命を無常の風に任すること勿れ、

無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身已に私に非ず、命は光陰に移されて、暫くも停め難し、紅顔いつくにか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし、熟觀する所に、往事の再び逢ふべからざる多し、無常忽ちに到るときは、國王、大臣、親暱、從僕、妻子、珍寶、たすくるなし、唯だ獨り黃泉に趣くのみなり、已れに隨ひ行くは、只だ是れ善惡業等のみなり、

今の世に因果を知らず、業報を明らめず、三世を知らず、善惡を辨まへざる邪見の黨侶には群すべからず、大凡因果の道理、歴然として私なし、造惡の者は墮ち、修善の者は陞る、毫釐も忒はざるなり、若し因果亡して虚しからんが如きは、諸佛の出世あるべからず、祖

師の西來あるべからず、  
 善惡の報に三時あり、一者順現報受、二者順次生受、三者順後次受、  
 これを三時といふ、佛祖の道を修習するには、其の最初より、斯の  
 三時の業報の理を効ひ驗らむるなり、爾あらざれば、多く錯りて邪  
 見に墮つるなり、但だ邪見に墮つるのみに非ず、惡道に墮ちて、長  
 時の苦を受く、  
 當に知るべし今生の我身、二つ無し三つ無し、徒らに邪見に墮ち  
 て、虚しく惡業を感得せん惜からざらめや、惡を造りながら惡に非  
 ずと思ひ、惡の報あるべからずと邪思惟するに依りて、惡の報を感  
 得せざるには非ず、

第二章 懺悔滅罪

佛祖憐みの餘り、廣大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を證入せ  
 しめんが爲めなり、人天誰か入らざらん、彼の三時の惡業報必ず感  
 ずべしと雖ごも、懺悔するが如きは、重きを轉じて輕受せしむ、又  
 滅罪清淨ならしむるなり、  
 然あれば誠心を専らにして、前佛に懺悔すべし、恚麼するごき、前  
 佛懺悔の功德力我を拯ひて清淨ならしむ、此功德能く無礙の淨信  
 精進を生長せしむるなり、淨信一現するごき、自他同じく轉せら  
 る、なり、其の利益普ねく情非情に蒙らしむ、  
 其の主旨は、願くは我れ設ひ過去の惡業多く重なりて墮道の因縁  
 ありごも、佛道に因りて得道せりし諸佛諸祖、我を愍みて業累を解  
 脱せしめ、學道障り無からしめ、其の功德法門、普ねく無盡法界に

充滿彌綸せらん、哀みを我に分布すべし、佛祖の往昔は吾等なり、吾等が當來は佛祖ならん、我昔所造諸惡業。皆由無始貪瞋癡。從身口意之所生。一切我今皆懺悔。是の如く懺悔すれば、必ず佛祖の冥助あるなり、心念身儀、發露白佛すべし、發露の力、罪根をして銷殞せしむるなり、

第三章 受戒入位

次には深く佛法僧の三寶を敬ひ奉るべし、生を易へ身を易へても、三寶を供養し敬ひ奉らんことを願ふべし、西天東土、佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり、

若し薄福少徳の衆生は、三寶の名字猶聞き奉らざるなり、何に況や歸依し奉ることを得んや、徒らに所逼を怖れて、山神鬼神等に歸依

じ、或は外道の制多に歸依すること勿れ、彼は其の歸依に因りて衆苦を解脱すること無し、早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて、衆苦を解脱するのみに非ず、菩提を成就すべし、

其の歸依三寶とは正に淨信を専らにして、或は如來現在世にもあれ、或は如來滅後にもあれ、合掌し低頭して、口唱へて云く、南無歸依佛。南無歸依法。南無歸依僧。佛は是れ大師なるが故に歸依す、法は良藥なるが故に歸依す、僧は勝友なるが故に歸依す、佛弟子なること必ず三歸に依る、何れの戒を受るも、必ず三歸を受けて、其の後諸戒を受くるなり、然あれば則ち三歸に依りて得戒あるなり、

此歸依佛法僧の功德、必ず感應道交すること成就するなり、設ひ天

上、人間、地獄、鬼畜、なりと雖ごも感應道交すれば必ず歸依し奉るなり、已に歸依し奉るが如きは、生生世世、在在處處に增長し、必ず積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり、知るべし三歸の功德、其れ最尊最上、甚深不可思議なりといふこと、世尊已に證明します、衆生當に信受すべし、

次には應に三聚淨戒を受け奉るべし。第一攝律儀戒、第二攝善法戒。第三攝衆生戒なり、次には應に十重禁戒を受け奉るべし、第一不殺生戒。第二不偷盜戒、第三不邪淫戒。第四不妄語戒。第五不酤酒戒。第六不說過戒。第七不自讚毀他戒。第八不慳法財戒。第九不瞋恚戒。第十不謗三寶戒なり、上來三歸三聚淨戒、十重禁戒、是れ諸佛の受持し玉ふ所なり、

受戒するが如きは、三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提、金剛不壞の佛果を證するなり、誰の智人か欣求せざらん、世尊明かに一切衆生の爲に示します、衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る、位大覺に同うし已る、眞に是れ諸佛の子なりと、

諸佛の常に此中に住持たる、各方面に知覺を遺さず、群生の長へに此中に使用する、各各の知覺に方面露れず、是時十方法界の土地草木、牆壁、瓦礫、皆佛事を作すを以て、其の起す所の風水の利益に預かる輩、皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて、親しく悟を顯はす、是を無爲の功德とす、是を無作の功德とす、是れ發菩提心なり、

第四章 發願利生

菩提心を發すといふは、已れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり、設ひ在家にもあれ、設ひ出家にもあれ、或は天上にもあれ、或は人間にもあれ、苦にありといふことも、樂にありといふことも、早く自未得度先度他の心を發すべし、其の形陋といふことも、此心を發せば、已に一切衆生の導師なり、設ひ七歳の女流なりとも、即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ、此れ佛道極妙の法則なり、若し菩提心を發して後、六趣四生に輪轉すと雖も、其の輪轉の因縁、皆菩提の行願なるなり、然あれば從來の光陰は、設ひ空しく過すといふことも、今生の未だ過ぎざる際に、急ぎて發願すべし、設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふことも、尙ほ廻らして

衆生の成佛得道に回向するなり、或は無量劫行ひて、衆生を先に度して、自からは終に佛に成らず、但し衆生を度し、衆生を利益するもあり、

衆生を利益すといふは、四枚の般若あり。一者布施。二者愛語。三者利行。四者同事。是れ即ち薩埵の行願なり、其の布施といふは、貪らざるなり、我物に非されども、布施を障へざる道理あり、其の物の輕きを嫌はず、其の功の實なるべきなり、然あれば則ち一句一偈の法をも布施すべし、此生他生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべし、此世他世の善根を兆す、法も財なるべし、財も法なるべし、但だ彼が報謝を貪らず、自からが力を願つなり、舟を置き、橋を渡すも、布施の檀度なり、治生産業、固より布施に非ざること無

し、愛語といふは、衆生を見るに先慈愛の心を發し、顧愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なり、徳あるは讚むべし、徳なきは憐むべし、怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語を根本とするなり、面ひて愛語を聞くは、面を喜ばしめ、心を樂くす、面はずして愛語を聞くは、肝に銘じ魂に銘ず、愛語能く回天の力あることを學すべきなり、利行といふは、貴賤の衆生に於きて、利益の善巧を廻らすなり、窮龜を見病雀を見しとき、彼が報謝を求めず、唯だ單へに利行に催はさるゝなり、愚人謂はくは、利他を先こせば自らが利省かれぬべしと、爾には非ざるなり、利行は一法なり、普ねく自他を利するなり、

り、同事といふは、不違なり、自にも不違なり、他にも不違なり、譬へば人間の如來は人間に同ぜるが如し、他をして自に同ぜしめて、後れ自をして他に同ぜしむる道理あるべし、自他は時に隨ひて無窮なり、海の水を辭せざるは同事なり、是故に能く水聚りて海となるなり、大凡菩提心の行願には、是の如くの道理靜かに思惟すべし、卒爾にするここ勿れ、濟度攝受に、一切衆生皆化を被ふらん功德を禮拜恭敬すべし、

第五章 行持報恩

此發菩提心、多くは南閻浮の人身に發心すべきなり、今是の如くの



因縁あり、願生此娑婆國土し來れり、見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや、  
 靜かに憶ふべし、正法世に流布せざらん時は、身命を正法の爲に抛捨せんことを願ふとも値ふべからず、正法に逢ふ今日の吾等を願ふべし、見ずや、佛の言はく、無上菩提を演説する師に値はんには、種姓を觀ずること莫れ、容顔を見ること勿れ、非を嫌ふこと莫れ、行を考ふること莫れ、但だ般若を尊重するが故に、日日三時に禮拜し恭敬して、更に患惱の心を生ぜしむること莫れと、  
 今の見佛聞法は、佛祖面目の行持より來れる慈恩なり、佛祖若し單傳せずば、如何にしてか今日に至らん、一句の恩尙ほ報謝すべし、一法の恩尙ほ報謝すべし、況や正法眼藏無上大法の大恩、これを報

謝せざらんや、病雀尙ほ恩を忘れず、三府の環能く報謝あり窮龜尙ほ恩を忘れず、餘不の印能く報謝あり、畜類猶ほ恩を報ず、人類爭でか恩を知らざらん、

其の報謝は、餘外の法は中るべからず、唯だ當に日日の行持、其の報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は、日日の生命を等閑にせず、私に費やさざらんを行持するなり、

光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し、何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日を復び還へし得たる、徒らに百歳生けらんは、恨むべき日月なり、悲むべき形骸なり、設ひ百歳の日月は、聲色の奴婢と馳走すとも、其の中一日の行持を行取せば、一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の他生をも度取すべきなり、此一口の身命

は、尊ふべき身命なり、貴ぶべき形骸なり、此行持あらん身心自か  
 らも愛すべし、自からも敬ふべし、我等が行持に依りて諸佛の行持  
 見成し、諸佛の大道通達するなり、然あれば即ち一日の行持、是れ  
 神佛の種子なり、諸佛の行持なり、  
 謂ゆる諸佛とは、釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり、  
 過去現在未來の諸佛、共に佛と成る時は、必ず釋迦牟尼佛と成るな  
 り、是れ即心是佛なり、即心是佛といふは、誰といふぞと、審細に參  
 究すべし、正に佛恩を報ずるにてあらん、

曹洞教會修證義終

第四段

吾人之信仰

本宗信仰の標準に就ては、前段の修證義に於て、既に之を盡したれば、今又之を縷  
 述する必要なけれども、善きが上にも尙善からむことを欲するは教導の任に當れ  
 る者の親心なれば、聊か又吾人の信仰と題して其の一斑を陳述し、以て我宗數百萬  
 の人士と共に懺悔受戒の安心を獲得し、發願行持の起行を體認して、現當二世の  
 別なく、恒に方寸城裡に涅槃の妙境を開きて、二利雙雙、佛作佛行の妙徳を圓滿せむ  
 ことを期す、看者諒焉、以て余の徒らに頭上に頭を案じ、錯を將て錯に就くを怪む  
 ことなくんば幸甚、  
 夫れ我宗は、佛祖嫡傳の正宗にして、一經一論に依て建立せし者に非ず、故に高祖大師  
 曰く、本宗は佛法の總府なりと、敢て他土の往生を願ふに非ず、又五十二位の階級を歴  
 抵するにも非ず、唯だ娑婆即寂光、即心是佛と心得て、別に此身を易へざれば、菩提

の妙果を發得すること能はざるにあらず、故に又我本師釋迦牟尼世尊は、比馬刺亞山上成道の時、我與大地有情同時成道と、獅子吼せられ玉ひ、爲に或は一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛と説き、又有情非情同時成道等と説けり、爾來の祖師皆此意に則りて、或は法身覺了すれば無一物と詠じ又寤めて見たれば齒こそ白けれ等と讀まれたり、

誠に然り、諸法本來常自寂滅の相なれども、凡愚の吾人、各自に風波を起して、迷より迷に入り、癡より癡に轉ずるが故に、六道の輪廻は須臾も已むことなく、眞如の明月は未だ夢にだも見ることも能はざるなり、然れども看來るに、雲霧れて後の光と思ふなよ、元より空に有明の月にして、雲に人類のみに非ず、草木國土、悉皆成佛成道ならざるなきなり、地球は東に廻轉し、月は西に沈み、鳥は空に飛び、魚は水に躍る、皆成佛成道の面目に非ざるなし、故に云ふ一色一香無非中道と、然らば大地の有情、既に是れ一として成佛成道の面目ならざるなければ、さきの一佛とは、獨り釋迦佛を指すのみに非ずして、大地の有情非情、各個皆是れ此一佛なるなり、

然れども修せずんば顯はれず、證せずんば得ることなし、是故に佛祖廣大の慈門を開きて、吾等迷者の爲に宿習の頓悟業障を懺悔滅罪せしむ、此懺悔の功德に依りて、衆罪は草露の如く、消えて跡なく、而して入佛道の加行茲に成就して、當に佛祖正傳の大戒を受ることを得べし、已に此佛戒を受け終らば、從來の凡身此に脱して、成佛の正因まさに究盡せらるゝなり、之を前段にては、衆生佛戒を受ければ諸佛の位に入る、位大覺に同うし了る、眞に是れ諸佛の子なりと證明し玉へり、嗚呼吾等宿善の助くるに依りて、今や正傳の戒徳を仰ぎて諸佛の嗣子たることを得たり、然れば又焉ぞ袖手傍觀以て空しく社會を救済する慈念なきを得んや、是に於てか、發願利生、行持報恩の像作佛行も、自ら顯現すべきなり、然るに此行願や、一にして足らずと雖ども、今其の大綱を列擧せば、布施・愛語・利行・同事、之を四枚の般若と云ふ、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧、之を菩薩六度の行と云ふ、其の名異同ありと雖ども、意豈に同一圈内を出んや、皆受戒入位の妙徳に催ふざるゝ行願にして、自を度し他を度し以て日に如來圓滿の淨域に歸入する所以の者なり、

己に歸入するや、入我我入、汝是れ渠に非ざれども、渠正に是れ汝なれば、自己一日の  
 行持、當に自己一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の佗生をも度取すべきなり、  
 故にたとひ漁父なるも、一たび其の本來の成佛成道なる理致を了知して、宿習の惡業  
 を懺悔し、以て受戒入位發願、利生せば、魚鼈を捕へ、魚鼈を賣り乍らも、身は是れ應現  
 の觀音にて、心大悲に住じ、身邪行を離るゝことを得む、人に師たる者も亦然り、吾人  
 は既に佛戒を受けて諸佛の嗣子たる者なることを認知して、人にも教授し、又之を訓  
 誨したらんには、即ち是れ應現の文殊にて、人間一の活菩薩なり、菩薩とは、普ねく救  
 ふとの義なれば、觀世音菩薩は、三十三に身を現じて救濟し玉ひ、釋迦牟尼世尊は、千  
 百億化身とて、處處現處處身、利として應現說法せざるとなし、楠廷尉は、當に生前精  
 忠を盡したるのみに非ず、弟正季と俱に、湊川凄風の夕、七たび人間に生れて此賊  
 を平げひと誓はれ、行基菩薩は、説化の外、更に橋梁を架し、道路を開き、聖德太子は、  
 悲田院を設け、施藥院等而建つ、皆是れ薩埵の行願に非ざるなし、故に、吾人も亦願く  
 は、七生は百生も千生も、生れ易り死に易り、以て三界の迷へる衆生をして轉迷開悟、

即ち速に佛果を成滿せしめむことを、

之を要するに、我宗の安心は、修證不二と談じて、修を待て証あるに非ず、證し終て修  
 を捨るに非ず、唯た修中に證あり、證上に修ありと認得するに在るのみ、故に修行の面  
 目、直に是れ本證の妙修にして、證之を離るゝに非ず、證契の面目、亦直に是れ妙修の  
 顯現にして、修之を離るゝに非ざるなり、是を以て、上智下愚を論せず、利人鈍者を擇  
 ばず、齊く衆罪を懺悔せしめて、難値の大戒を授けて、本證の妙徳を全うせしむ、故に  
 其の妙修たる利生の誓願を發起し、無縁の大悲に安住し、以て日日の行持を勤行せし  
 む、而して其の勤行や至難なるに非ず、唯た僧は僧に、文は文に、農は農に、商は商に、  
 各其の業務に安じて、其の本分を盡し、以て毫も自己の三昧を味まざるに在るの  
 み、之を眞個の報恩とは稱するなり、

昔は六祖大鑑慧能禪師、一日韋刺史に示して曰く、自性迷へば即ち是れ衆生、自性覺れ  
 ば即ち是れ佛、慈悲是れ觀音、喜捨を名けて勢至と爲す、能淨は釋迦、平直は彌陀、人  
 我是れ須彌、貪欲是れ海水、煩惱是れ波浪、毒害是れ惡龍、虛妄是れ鬼神、塵勞是れ魚

籠、瞋恚是れ地獄、愚痴是れ畜生と、又曰く、修行せむと欲せば、家に在ても亦得、寺に  
 在るに由らず、在家も能く行せば、東方の人の心の善なるが如く、在寺も修せずんば、  
 西方の人の心の悪なるが如し、但だ心清浄なれば即ち是れ自性西方と、蓋し思ひ半ば  
 に過ぐる者あらむ、あなかしこ、  
 布施とは貪らざるなり、持戒とは犯さざるなり、忍辱とは怒らざるなり、精進とは怠ら  
 ざるなり、禪定とは亂心せざるなり、智慧とは愚癡ならざるなり、之を止門の六度と  
 稱す、更に行門の六度あり、所謂布施には、法施と財施とありて、持戒には、放生、布  
 施、梵行、和諍語、常軟語、誠實語、質直語、不淨觀、慈悲觀、因緣觀、等の如き十善、乃至  
 數百の戒品あり、忍辱には忍耐、能く苦に堪へ、精進には敢爲、能く善に進み、禪定に  
 は安靜、能く身心を調へ、智慧には明徹、能く是非を判別して取捨を定むる等、凡そ是  
 の如き皆是れ身口意の三業をして内外玲瓏ならしめて、如來圓滿の清浄界に引入す  
 る大慈悲説なり、他は異日法座の節を以て、更に詳にする所あるべし、あなかしこ、

# 別録

## 第一段

### 高祖承陽大師略傳

大師諱は道元、希玄と號す、人皇六十二代村上天皇九代の苗裔にして、父は久我内大臣  
 源通親公、母は松殿攝政太政大臣藤原基房公の女なり、  
 八十三代土御門天皇正治二年正月二日、京師に生れ玉ふ、眼に重瞳ありて、儀容凡な  
 らず、相人視て以て必ず是れ聖人ならんと言はれき、時に通親公は、五十二歳にして、  
 大師の外、風雛尙二あり、長を道具と云ひ、次を通光と云ふ、大師は又其の次なり、通光  
 公後に太政大臣と爲り、通具公大納言と爲る、然るに大師三歳の時、父通親公薨せしか  
 ば、長兄通具公の養育する所と爲りて、四歳のとき李膺が百詠を讀み、七歳にして毛  
 詩左氏傳を讀み玉ふ、耆老の名儒皆讀して曰く、是れ神童、凡夫の品類に非ず、後來必  
 ず大器と爲るべしと、然れども八歳の冬、母公亦世を厭はれしかば、大師別離の悲涙に

堪へ玉はずして、會々香の烟の立ち登るを觀じ玉ひ、爲に密かに世の無常を悟り、深く  
求法の大願をぞ起し玉ひし、

承元二年、九歳にして俱舍論を讀み玉ふ、時人皆其の聰明に驚き、恰も文殊の如しと  
稱しあへり、是時攝政師家公、大師を得て猶子と爲し、家の重職をも譲り以て朝廷の  
要臣と爲さんと計りしも、大師聽き玉はずして曰く、是は我が所望に非ず、我は只だ如  
何にもして出家學道せんと欲するのみとて、敢て動き玉はざりけり、

順德天皇建曆二年、十三歳の春、夜中遂に忍び出で、叡山の麓なる、舅の良觀法眼の  
下に辿り寄り玉ひき、法眼大に驚きて問はれけるは、元服斯に近し、一族定て其の憤  
りあらん、如何んと、大師乃ち答へらく、我悲母逝去の砌、遺囑して曰く、汝ち相掛へて  
出家學道して我後世を吊へかしと、故に我れ出家して、悲母の菩提を吊らばんとの玉  
ひしかば、法眼覺へず感涙を催ふし、爲に之を許し玉ひて、横川首楞嚴院般若谷なる、  
千光房へぞ登せらる、

是に於てか、建保三年大師年十四の四月九日、始て千光房即ち座主公圓僧正に就て藉

髪せられたり、然るに翌春、熟ら諸經論を涉獵せられしに、一大疑問の起りたれば、  
三井の公胤僧正に就て問はれしも僧正輒すく、答ふることを能はずして、建仁寺榮西に  
參すべしと示されければ、同年直に榮西禪師の室に投じて、爰に心要を開き玉ひき、時  
に十六歳なり、然れども榮西禪師、七十五歳を以て其年の七月逝去せられしかば、法  
嗣明全和尚に隨侍して、茲に九年の星霜を經玉ひき、

後堀川天皇貞應元年、大師年二十三、既に大藏經を閲すること前後二回、其の翌二年、  
二十四歳の春、更に小成に安じ玉はずして、師明全和尚と共に入宋の事を企て乃ち  
二月二十二日に東山を出で、三月下旬、筑前博多の津にて渡海の纜を解き玉  
ひ、爾來天童山にて無際和尚に相見し、徑山にて如琰禪師に參見し、平田にて元鼎和  
尚に見え、外遍ねく諸方を歴遊して、再び天童に歸り、新たに無際和尚の後席を董され  
たる、長翁如淨禪師と云ひけるに隨侍して、實參實究此に亦三年を經玉ひき、一日  
午夜の坐禪に、隣僧の如淨禪師に呵責せらるるを聞きて身心脱落し玉ひ、安貞元年  
十二月、天童山を下り、翌年一月、風波穩かに肥後川尻の港に着岸せられたり、故に入

宋前後、方に五星霜を經玉ひけり、直に上洛建仁寺に寓し玉ひて三年を經過し、又宇治の深草に閑居し玉ひ、後更に興正寺を建立して、普ねく十方の衆生を接化せられき、斯くて深草に閑居し玉ふこと三年にして、興正寺に住する、十有一年、而して後嵯峨天皇寛元元年七月十六日、又宇治を出で玉ひ、其の月の末つかた、終に越前吉田の郡にぞ移らせらる、爾來開堂說法、法會の來衆、常に一千餘人に至れりと云ふ、

寛元三年四月、結夏の日、上堂の前後に、天花亂墜し、同五年正月十五日の布薩會に、五色の彩雲、方丈の正面の障子に懸り、後深草天皇寶治三年一月一日の羅漢供養式には、木像畫像の羅漢、及び其他の諸聖、尊より、皆光明を放たれて、大供養を受け玉ひきと成む、仰ぎても尙尊むべき事にこそ、是より先ら寶治元年八月、北條時頼の懇請に依り、鎌倉に下向し玉ひて、菩薩戒を授け、說法教化、半歲餘にして歸錫せられ玉ふ、時頼強て之を止め、寺院を建立して開山祖師と仰ぎ奉らんと爲したりしも、終に辭しにき、

然るに大師の道譽益々盛なりしかば、後嵯峨天皇親しく紫衣一領を勅授せらる、初は固く辭したりしも、終に聽許し玉はざりしかば、高閣に安置し奉りて、終身御身に觸れしめざりきと成む、爲に勅命重きこと重重との一句、鎮へに國家の柱礎とぞなりける、越えて建長三年一月五日の夜、御山の山奥にて、二百許の鐘聲自響き渡りしかば、列座の者皆奇異の思ひを爲し、が、明けて四年夏の比より、終に微疾に罹らせられ、爲に最後の說法として、八大人覺を講演せられたり、

抑も八大人覺と云ふは、釋尊御入滅の時、御説かせられたる者にて、一には小欲二には知足、三には樂寂靜、四には勤精進、五には不忘念、六には修禪定、七には修智慧、八には不戲論、是なり、建長五年七月、後を懷昇和尚に譲りて、八月上洛せられ、途上木の芽峠を經玉ひしかば、

草の葉にかぞでせる身の木のめ山雲に路あるこゝちこそすれ  
と詠じ玉ひて、高辻西の洞院覺念が宅にて療養せられける、一日室内を經行し低聲に讀誦して曰く、若於園中、若於林中、若於樹下、若於僧房、若白衣舍。乃至

諸佛於此轉於法輪。諸佛於此。而般涅槃。と誦して、面前の柱に書き附け給ひけり、然して其の年の八月二十八日、終に起たず、夜半偈を書して、蓋焉涅槃に入り玉ひき、波多野義重、天に仰ぎ地に伏し、以て五十四年の早逝を惜むこと比類なく、其外覺念、僧俗遺弟等、列座の者共、皆悲嘆の涙に咽はざるは無かりき、嗚呼惜みても尙餘りあり、遺弟野衲等、亦豈悲みに堪ふべけんや、

五十四年。照第一。天。打箇。躑。跳。觸。破。大千。嘆。渾身無著處。活陷。黃泉。

とは、即ち是れ最後の遺偈なりけり、著はす所、正法眼藏一百卷、清規二卷、坐禪儀一卷、學道用心集一卷、廣錄十卷等なり、嘉永七年、孝明天皇勅して佛性傳東國師と諭し玉ひ、明治十三年、今上天皇更に勅して、承陽大師の徽號を加賜せられ玉ひき、故に具には、高祖佛性傳東國師承陽大師と尊稱し奉るべし、今明治三十年を去る、實に六百四十五年なり、

東山法演和尚頌云。臉發擔板漢。貼神麻三斤。千百年滄海。無處著滌身。

# 第一二段

## 太祖圓明國師略傳

國師諱は紹璣、登山と號す、人皇八十九代龜山天皇文永五年十月八日、越前國多福村の豪族藤原某の家に生る、風姿秀逸、面貌端正、自ら尋常の兒童に非ずと名ひ、是より先き、父母共に其の子なきを憂ひ、念々常に己まざりしが、一歲朝顔の開きし頃、偶々世の無常を併せ觀せられて曰く、我等此世に生れて、外別に不足なきも、唯だ繼嗣無きを如何せん、殊に人の命は朝顔の露よりも、脆しと聞さつれば、如何にもして生前に一子を設けて、死後の菩提をも用らはれかしと、涙乍らに物語られければ、妻も諸共、綾の袖をぞ絞られける、斯くて夫人には、既に三十を越えつるも、未だ懷妊の催ふし無ければ、片時も愛ひ已まざりしが、又或歳の春の彼岸に墓參し、恭しく祖先の靈に向て、繼嗣のあらんことを祈願し、更に寺に入り、佛を禮して祈られたりしに、恰も住持僧の、殺生と放生との、一



は極悪罪業なる因縁を結び、二は利益廣大なる道理あるを、詳かに、説示し、即ち狼りに殺生する者は、現世に悪魔の此身を離れざるのみならず、來世は必ず惡道に墮し、又前世に殺生せし因縁にて、此世に多病の身を受け、或は繼嗣を得ざるもあり、之に反して放生は、此世に諸神諸菩薩の護りを受けるのみに非ず、後世は必ず善處に生じて、快樂亦窮まり無く、且つ現世にて壯健の身を受け、繼嗣の愛ひも更になし、故に至心に懺悔して、放生の善業を行はば、從來の罪業も自ら消滅して、獨り繼嗣の愛ふるに足らざるのみならず、吉祥も亦日びに至らんすと説かれければ、身の上忽ち思ひ合はされて、坐る悲感に堪へざりきとぞ、

依て夫人も具さに之を夫に語りしかば、爾來共に深く夙惡を懺悔し、放生の業をも營なまれたりしが、又多福の觀音とて、靈驗最も明かなる尊體近寺に奉祀しあれば、夫人亦深く之を信仰し奉り、専ら繼嗣のあらんことを祈願し玉ひたり、

然るに三十七歳の正月上旬、一夜日輪口に入ると夢みて、遂に懷妊の重身と爲り、十月八日の朝、旭日の昇ると共に、無事玉兒を出生せられたり、抑も夫人には其の

間常に、彼の觀音大士に祈誓して、日日普門品を讀誦し、又禮拜等、毫も怠りざりきと云ふ、經に曰く、若し女人有て、設へば男を求めんと欲して觀世音菩薩を禮拜し供養せば、便ち福德智慧の男を生まん、設し女を求めんと欲せば、便ち端正有相の女を生まん、と、法の道、豈に仰ぎ曾まざるを得んや、

國師生れて三歳、資性最も穎敏、時に合掌南無南無と稱へつゝ、三寶を禮することあり、或は石を積て寶塔に比し、土を丸めて佛像に擬し、又母に順ひて普門品を誦する等、自ら佛事を爲すを以て殆ど喜樂と爲す者の如し、一日母に従て、觀音の聖像を見奉りしに、忽ち母に問うて曰く、此菩薩は何處に住し玉ふや、又如何なる業を作してか斯く諸人の尊敬を受け玉ふや、又菩薩も人間なるや、將た人間にてはあらざるやと、尋ねられしかば、母も輒ち答ふることを能はず、漸やくにして曰く、御身が問ふ所は母も能く知りたるに非ざれども、此の菩薩は善く諸の方所に應じて其の身を現じ、弘誓の深きこと海の如し、故に唯だ此菩薩に歸命し奉りて、大悲の光明に攝取せらるべきのみと告げ玉ひしかば、是より更に出家求法の志を起し給ふに至りし、國師時

に六歳、

既にして八歳の春を迎へしが、出家の念愈々深く、遂に父母に向て、強て之を請ふに至れり、然れども父母繼嗣の絶えんことを恐れて、容易に許さざりしかば、今日より食事せずとて、決志益々動かす、絶食三日に及びたれば、父母も大に驚き、遂に其の意の如く爲すに至りき、依て其年の四月八日、釋尊の誕生日を期して、直に永平寺に登り、高祖大師より第三世なる、徹通義介禪師に就て剃髪したりけり、時後宇多天皇健治元年なり、其の後數年の間は、親しく介祖の下に在りて、廣く内外の典籍を學び、辨道修學に餘念なかりき、十八歳にして如て其の下を辭し、寂圓和尚に大野寶鏡寺に謁し、又叡山に登りて天台の法門を學び、法燈禪師に紀州興國寺に參じ、外徧ねく天下の叢席を歴參して、到る處に歎美の聲を涌しき、然れども敢て安じ玉はずして、再び寂圓和尚の下に還り、尋で又介祖を歸省したりしかば、祖大に喜びて、懇勸に慰勞せられたり、已にして介祖加州大乘寺に移錫せらるゝに及び、國師亦隨從して、參詣問法に餘念なく、七年恰も一日の如く、其間又大藏經をも閱覽せられ給ひき、

伏見天皇永仁三年、國師年二十八、其の一月十四日、入室以て高祖大師よりの法衣を授與せらる、翌四年、細川賴春の屬將某の請に依り、始て阿州の城滿寺に住し、越えて三十歳の時、寒巖義尹禪師に、遙に肥州の大慈寺に謁し、又後伏見天皇正安二年、介祖の召ありしかば、乃ち城滿寺を辭して、再び其の左右を補翼し給ひけり、時に介祖既に老て、八十四歳の高齡にも達したれば、終に國師に命じて後席を繼がしめ、爾來愈々天下の龍象をして門下に輻湊せしめたり、峨山、明峰、無涯等の如き、皆師に歸來して法運益々隆盛に赴きけり、

越えて九十四代花園天皇の延慶二年、國師年四十二、其の九月十四日、介祖九十一の大齡を以て逝去せられしかば、翌一週忌の供養に、國師上堂說法せられしに、何ぞ圓らん、亦天華亂墜の祥瑞ありき、四十四歳の秋、加州淨住寺の懇請に依りて開山第一世と爲り、其の翌又能州の人滋野信直の屈請に依りて、屢々授戒說法せしかば、信直大に喜び、遂に北條貞時に真言して、自家の山莊酒井保の地若干を國師に奉りたり、奇峰怪巖、如る法幢を建つるに適したれば、乃ち其の請を容れ、後又同く能州の檀

越富樫家尙父子淨財を喜捨して、此處に伽藍を建立し、以て偏に國師の法雨を喜び玉ひき、今の洞谷山永光寺、即ち是なり、斯くて文保二年國師年五十一歳の時、母夫人には、八十七歳を以て逝去せられしかば、常に念持し玉ひし觀音大士の聖像を奉じて、之を供養すること恰も悲母に奉侍するが如くなりきとなん、今尙永光寺に秘任せり、九十五代後醍醐天皇元應元年九月十五日、羅漢講式を修せらる、然るに亦十六尊皆光を放ちて應現の奇瑞ありしかば、毎月十五日に、必ず羅漢供養を修することとは爲りにき、元享元年國師年五十四の夏、六月、定賢律師の懇囑に依りて、其の住院たりし諸嶽寺を受けて改住し玉ひ、諸嶽山總持寺と改めたり、今の大本山總持寺、即ち是なり。

此に最も特筆大書すべきは、後醍醐天皇より十種の疑問を垂れさせ玉ひしに、玲瓏玉の如く速に奏對し奉りし事是なり、叔威實に斜ならず、爲に紫衣を賜はり、且つ九月に至りて、藤原行房に命じて、寺號の勅額を賜はり、更に優遇して官寺と爲し玉ひき、殊に翌二年、皇后御分身に臨み、大に御苦惱ありせられしに、勅ありて總持寺の放

光菩薩を紀念し奉られければ、玉體恙なく分婉しまし、を以て、國師の德音更に盛を加へ、爲に八月二十八日、又特に綸旨を下して、日本曹洞の本山、賜紫出世の道場と爲し玉ひき、嗚呼今日我宗の門風をして一層隆盛ならしめたる者、實に亦之が爲なり、國師時に年五十五、

越て正中元年、雲霧日に臨集せしかば、十箇條の龜鑑を書かしめ玉ひ、更に清規等も亦一々具備せしかば、茲に峨山紹碩和尚を擧げて後席を董さしめ明峰素哲の、二弟を率ゐて、永光寺に退院せられたり、然るに正中二年の春より、漸やく微疾に罹からせられたれば、八月八日より、衆の爲に八大人覺を提示せられ、十四日に淨髮沐浴して介祖の眞を供養し奉り、翌十五日の羅漢會をも嚴修せられて、説法殊に常の如くなりしに、何ぞ闕らん、夜半に至るや、鐘を鳴らして大衆を方丈に集め、徐ろに衣を整へて登坐、衆に示して曰く、念起是れ病、續がざる是れ藥、一切の善惡都て思量するてと莫れ、續かも思量に涉れば白雲萬里と。更に一偈を書して曰く、

自耕 自種閑田地。幾度賣來賣去新。無限藍苗繁茂地。法堂上見挿

鍛 八〇

と筆を抛て坐化し玉ふ、時に年五十八、靈龍を留むること七日、尊容猶生けるが如くなりしかば、四來の道俗をして、更に愛慕の情をぞ増さしめし、滅後三十年を経て、正中九年三月二日、後村上天皇勅して佛慈禪師の號を賜ひ、越えて安永元年十一月二十九日、後桃園天皇又宸翰を賜はりて、弘徳圓明國師の號を追證せられ玉ひき、著はす所、傳光錄、坐禪用心記、三根坐禪說、清規、信心銘拈提等なり、

嗚呼高祖大師は、五十四年を以て登仙し玉ひ、今又大祖國師は、五十八歳を以て羽化し玉ふ、何ぞ天の我宗に幸ひせざるの甚しき、若し兩祖をして共に大歸を有らしめば、其の作す所、果して如何、數百歳の下、尙雲孫をして潜然眞前に泣かしむ、今亦此傳傳を拜讀せん者、感慨果して如何、唯だ須らく一炷の心香を拈じて、萬縷の妄念を燒却し、以て自他の菩提に回向し奉るべきのみ、

### 第三段

#### 永平寺略縁起

曹洞宗 大本山永平寺は、福井縣越前國吉田郡志比村に在り、今を距る凡そ六百五十年、波多野出雲守藤原義重の開基する所なり、此地本と古寺の趾ありて、今の地藏院は、弘法大師の開闢にて、且つ其の御作に係る千体の地藏尊、今尙靈壇に奉祀せられたり、

是より先高祖大師、宇治の興正寺に在りて、遍く接化利生せられしかども、其他は皇城に近うして、月卿雲客の車馬斷へず、爲に度生の方便には善きも、大師最も幽閑を望ませ玉ふには適せざりければ、波多野義重白されける様、越前吉田郡の内、深山に安閑の古寺候、某甲知行の内なり、御下向ありて度生說法あらば、一國の運をた當家の幸ひなるべしと言上したりければ、大師答へらく、我先師如淨古佛は大宋越州の人なれば、今越國の名を聞くもなづかし、我が所望なり、依て參向あるべしとの玉ひて、後

嵯峨天皇の寛元元年七月、直に深艸を出發して、越前に移らせ玉ひたり、斯くて其年の十一月六日までは、吉峯精舎に在りて説法度生し、後又禪師峯に移らせらる、間、先きの義重、左金五禪門覺念と相謀りて、一字を建立せんと欲し、幾處の山林を尋ねしに、市野山の東、傘松の西に於て勝地を得たりしかば、同く其年の閏七月、義重自ら經營して、吉峯の茅屋より移り玉ひたり、然れども規模なほ狹隘なりしかば、寛元二年二月、更に地を開きて建立し奉り、四月二十二日に落成し、七月十八日に開堂説法ありて、山を吉祥と名け、寺を大佛と稱せられたり、是れ吉祥とは帝釋宮の名、又世尊成道の時、吉祥草を敷き玉ひ、而して今や正に此の大轉法輪處を建立したる者なれば、吉祥ならざるなきが故に、然か名けし者なるか、然れども大師自ら一頌を賦せられたるには曰く、諸佛如來大功德。諸吉祥中最高上。諸佛俱來入此處。是故此地最吉祥。とあれば、其の意亦以て見るべし、次に大佛とは、重義の號を用ひし者にて、初め義重京師に在るや、深く大師に歸依して、屢々深艸にも參じ、後又終に入道せられしかば、號を大佛寺と稱し、戒名を如是と

附せられしに由る、傳に曰く、義重曾て一の愛妾あり、風姿閑雅、能く其の意に適ひて、常に左右に侍りしに、夫人甚だ之を妬み、依て義重の上命を奉じて京師に到るを待ち、密に人をして妾を取り、山中の深地に沈めしめれば、身死すとも、恨み何ぞ没せん、爲に深夜常に厲と爲りて、徃徃叫喚の聲を爲すと云ふ、時に一僧あり、花地を尋ねて路を村民に問ふ、村民曰く、徃くと莫れ、近日妖怪出で、徃來絶すと、僧曰く、奇なり然らば我れ、試に徃て之を驗せんとして、乃ち到り、定座以て深更を待ちしに、果せる哉、凄風忽地に吹き起り、須臾にして一女水面に浮び出で、直に僧の前に來りて跪坐、頻りに潸泣しければ、僧具さに其狀を問ひ、且つ妾が爲に冥福を修せんことを期して、直に京師に徃て、義重に告げれば、義重大に驚き、輒ち俱に共に深艸に到りて、救を高祖大師に求む、大師依て佛祖正傳菩薩大戒の血脈を授け玉ふ、是に於てかまた山中を穿ち、恭しく彼池に投せしかば、空中忽ち聲ありて曰く、我れ今無上の妙果を得て、頓に幽冥の苦を脱かれ、菩提の佛果を成すと、義重之を聞て大に喜び、爲に此の寺宇を構へて、以て開山第一祖に懇請し奉りたるなりと、

然れども寛元四年六月十五日の上堂より、大佛寺を改めて永平寺と名づけたり、是れ亦震旦後漢の明帝永平十年、佛法始めて渡來せしに、今又曹洞の正宗始めて我國に東傳せしゆゑ、其の曆號を擧げて改められしなり、殊に文字上よりして之を觀るも、吉祥にして且つ永々大平ならば、亦之れに過ぐることを無ければなり、御嵯峨天皇の時、勅額を賜はり、又後圓融天皇の時、本山出世の道場に補任せられき、爾來累葉相繼ぎ、法幢日に盛なりしが、第五世義雲禪師住持たるに及び、更に今の地に移轉して、廣大の規模を今日に現存せしめたりと云ふ、是れ師を中興と稱する所以にして、門風亦爲に大に興れり、故に今尙大佛寺の舊趾、及び血脈池等、祖山の東南隅に在りて、幽凄尙尙寒し、次に又特書すべきは、第二十一世宗奕禪師の住持たるに及で、參内し、特に勅せられて大通智光禪師の號を賜はりしより、遂に定めて祖山の恒例と爲られしこと是なり、故に我國十三宗三十五派ありと雖ども、獨り禪師號を勅授せらるゝ者は、唯だ我曹洞一宗のみ、嗚呼豈に高祖大師の道譽尙千載の下に輝く者に非ずや、

抑も永平寺に住持たるべき者は、第二十七世英峻禪師の下總の總寧寺より昇住したるに及て、爾後必ず關三刹より昇住するの慣例と爲りしに、(關三刹とは、下總の總寧寺、武藏の龍穩寺、下野の大中寺是なり、)明治元年、第六十世臥雲禪師の時に至り、始めて關三刹の宗政執行を廢し、續て明治四年、第六十一世環溪禪師、宇治の興正寺より昇住するに及で、更に關三刹より昇住する慣例を止め、爾來専ら一宗の公撰に依て住持すべき事に改めて、明治十二年、雪鴻禪師即ち其の撰に當て普山したり、之を公撰住持の嚆矢と爲す、現今の貫首は、大休悟由禪師にて、晋山式の當日、性海慈船禪師と勅號せられたり、高祖大師より、實に第六十四世の法孫にぞありける、

# 第四段

## 總持寺略緣起

本宗 大本山總持寺は、石川縣能登國鳳至郡櫛比村に在り、今を距る凡と五百七十年、初は律院にて、諸嶽寺と名け、行基菩薩の開基なり、觀音 大士を本尊として、靈感日に新たなりしが、後醍醐天皇元亨元年四月十八日の夜、寺主定賢律師、偶々夢みらく、本尊觀音 大士、大慈の光明を放ちて、來り告ての玉はく、今釋迦牟尼佛より嫡嫡相承せる、第五十四世の善知識、方に本國酒井保の洞谷山に出世して、大に法輪を轉せられ、爲に靈山の一會、今尙儼然たるを得たれば、汝ち速に此寺を彼の聖者に譲り、以て永く佛法興隆の道場と爲すべしと、然るに太祖國師も亦其夜、坐禪の床に在りて、恍惚一の靈夢を感じたるは、觀音 大士微妙端嚴の相貌にて、來迎し告ての玉はく、我れ一所の寺宇を擧げて師に與へん、故に予に尾して來れとて、一古寺の山門に誘はれけるに、何ぞ圖らん大衆門迎、容儀皆肅然たりしかば、國師思はず、入門の語ありて、總持の

一門、八字に打開すと言ひ玉ひて、遍ねく其の堂宇を觀玉ふに輪奐實に極りなく、殊に放光菩薩の尊躰さへ安置しあれば、國師覺えず大喝一聲せんとしたりしに、忽然夢覺めたりきとまじ、

斯くて定賢律師も、既に靈夢を感じたる上、豫て國師の德音をも深く歎慕せられをりしかば、何ぞ以て屈請せざるべけん、依て直ちに檀越に告げて國師の許に到り、具さに事の由を陳述し、以て國師の來臨を懇囑したりければ、國師も亦定中の奇夢を語り、以て直に之を許し玉ひしかば、律師の喜び譬へん様なく、且つ深く奇瑞に驚きつゝ、直に寺門を國師に譲り玉ひけり、是れ即ち今の大本山總持寺にて、其年の六月八日、開堂說法し玉ひ、夢中の語に基て、總持寺と改め、山號をば、元の寺號を以てして、諸嶽山とぞ名けられける、其外尙律師には、一切の寺領をも併せて獻納せられしかば、國師も亦深く其志に感じ、律師の身まかるや、直に其の像を安置して、常に香華を供せられ、殊に龜鑑十條の中にも一當寺は原と致院たり、然れども定賢律師の懇請に因りて、教を革め禪と爲す、所以に定賢律師を擧て當山の開基と爲し、靈位を設け香花を供

して永く廢弛すること勿れど、制定せられたる、亦所以なきに非ず、  
 同年八月、勅裁に依て官寺と爲り、翌二年八月、又特に繪旨に由りて、本山賜紫出世の  
 道場とは爲りにき、是れ國師は、高祖大師四世の法孫なるも、尙祖山に對して、均しく  
 大本山たるを得し所以なりかし、然れども永平寺とは自ら異なりて、別に住持人を  
 置かず、世世輪番を以て一山を董さしめたり、是れ亦國師の龜鑑十條中に、一當寺  
 は、本と檀越なし、故に合に托鉢行乞し、以て持住行道すべきに、皇詔一たび降るに  
 追で、朝家萬年の功德所と爲りたれば、予が嗣法の門人、今より百千年の後に到る迄、  
 當山を仰で本寺と爲し、輪流住持し、以て寶祚の長久を祈り奉るべしと云へるに  
 基きし者なり、  
 爾來數百年、明治維新に到るまで、輪家故の如くなりしも、時勢の變遷と共に、獨住す  
 ることに改めて、明治三年七月、加州天徳院の住持たりし奕堂禪師、先づ其の撰に當り  
 て晋山し、續て明治十三年、今の貫首大岡栞仙禪師、特撰に依て、住山す、故に奕堂禪  
 師を以て、永く當山の獨住第一世と爲して、以下之に順ずと名む、  
 (畢)

自跋

凡そ信仰の統一を計ふむと欲せば、檀信一般に於ける  
 一定の行持書あらむとを要す、回首せば、我教海既に洞  
 上諷經日用行持集、及び洞上行持諷經錦囊等あるも、單  
 に僧侶専門用の具にして、未だ檀信一般に向ての要あ  
 るを見ず、殊に其の信仰に就てのたづきとも爲るべき  
 者なければ、聊る遺憾に思ひ、此に學餘良辰を卜して、麻  
 溪の一林中に筆を弄する事とは爲りぬ、時明治丙申十  
 月上浣、爾來直に上梓せらるべき處なりとも、故ありて  
 遲延、且つ其の間、又在家日用諷經、及び禮誦式等續出し  
 たりければ、六日の菖蒲めきて頗る慊焉たらすんはあ



らざれども、抑も蒐集する所、尙幾許か裨益する所多からむを愚考せられければ、且つ其儘衣魚のすみか、れ爲さんもほいなき事にしあれば、茲に光融館主の請に依りて、不朽を期する事は爲りぬき、余の不文、未だ盡さざる所及び假名の振様寫經の句讀等、往往略式を用ゐし所あるも、空文よりは寧ろ實際をこの觀念よりして然りし者なれば、併せて讀者の諒焉を仰ぐ、聊か一言を跋して、敢て識者の垂教を待つ。

明治丁酉五月

編者天胤覺本和南謹誌

明治三十年七月八日印刷  
 明治三十年七月十日發行  
 明治卅一年六月廿四日增訂再版印刷  
 明治卅一年六月廿八日增訂再版發行



編輯者

松崎覺本

發行者

平本政次

印刷者

三島宇一郎

印刷所

弘文堂

發行所

光融館

東京神田區駿河臺西紅梅町十二番地

東京神田區表神保町二番地

東京神田區表神保町二番地

東京神田區駿河臺西紅梅町十二番地

大分縣豊前國宇佐郡和間村大字松崎八十九番地

發賣所

東京市牛込區神樂町一丁目六番地 益友社  
 東京市芝區露月町十八番地 鴻盟社  
 東京市麻布區飯倉町五丁目 森江佐七  
 大坂市東區本町四丁目 金尾種次郎  
 名古屋市門前町二丁目 其中堂 三浦兼助

大賣捌所

東京銀座尾張町二丁目 東海堂  
 全 神田表神保町 東京堂  
 全 神田裏神保町 田屋  
 全 京橋繪屋町 隆館  
 北

東京京橋銀座二丁目 文海堂  
 全 京橋繪屋町 良明堂  
 全 淺草廣小路 淺倉屋  
 全 本郷元富士町 盛春堂  
 全 本郷元富士町 田中屋  
 全 神田錦町一丁目 武藏屋  
 全 神田一ツ橋通 有斐閣  
 京都東六條中珠敷屋町 法藏館  
 京都下京區五條通 高倉西入萬壽寺町 西村十次郎  
 京都 柳技軒  
 京都市三條通高倉東人 出雲寺文次郎

光融館出版書籍目錄

松崎覺本師校訂編輯  
 ●天柱 禪師碧巖錄講義 全一冊大美金本塊クロ一  
 提唱 和裝全三冊正價二圓七十錢 紙數一千二百頁  
 山田孝道師校註  
 ●校補 禪門法語集 大美金本文字入●總ク  
 點註 三十種三十三冊合本 頁一〇一●紙數七百五十  
 稅十四錢  
 森大狂居士校註  
 ●續 禪門法語集 大美金本文字入●總ク  
 卅五種四十一冊合本 頁一〇一●紙數一千二百  
 二十錢  
 森大狂居士參訂  
 ●一休和尚全集 和裝美本三百頁  
 定價四拾錢 郵稅六錢  
 ●佛教大家論集 全部十二部一冊定價郵  
 稅共十二錢全部十二冊  
 洋裝合本正價郵稅共一圓五十錢●紙數一千五百頁余  
 森大狂居士參訂  
 ●禪東波禪喜集 和裝美本  
 林第 一澤港和尚垂示 合正價三十五錢  
 書編 正眼國師眼目 郵稅六錢

森大狂參訂  
 ●林第 道元禪師和歌集 和裝美本  
 書編 二法燈國師法語 合正價三十五錢  
 居士分燈錄 郵稅六錢  
 山田孝道講述  
 ●坐禪用心記 講義 紙數二百八十頁  
 普勸坐禪儀 郵稅四錢  
 織田得能師編  
 ●和漢高僧傳 和裝美本  
 定價六十錢郵稅六錢  
 字引定價郵稅共十七錢  
 校訂  
 ●大 大乘起信論義記 和裝  
 定價四十六錢  
 郵稅四錢  
 白隱禪師著  
 ●寢惚の眼覺 和裝大列  
 定價二十二錢  
 郵稅二錢  
 島地默雷師講述  
 ●維摩經 和裝大列  
 定價三十八錢  
 郵稅四錢

文學博士南條文雄師講述

●梵文阿彌陀經 冊一 定價 四十錢

●織田得能師講述 八宗綱要 冊一 定價 八十錢

●大內青樹居士講述 原人論 冊一 定價 二十五錢

●前田慧雲師講述 天台西谷名目 冊一 定價 三十錢

●織田得能師講述 大乘起信論義記 冊一 定價 九十錢

●藤谷暹由師講述 華嚴學葉 冊一 定價 拾八錢

●織田得能師講述 七十五法名目 冊一 定價 四十五錢

●織田得能師講述 佛敎大意 冊一 定價 貳拾錢

●前田慧雲師講述 正信偈 冊一 定價 貳十二錢

●村上專精師講述 因明學大意 冊一 定價 三拾錢

●池原雅壽師講述 因明三十三過本作法 冊一 定價 四錢

●姬宮大圓師講述

●善提心論 冊一 定價 十三錢

●釋清潭師講述 大乘止觀頌 冊一 定價 貳錢

●大內青樹居士講述 碧巖錄 冊一 定價 五拾錢

●釋宗演師講述 寶鏡三昧 冊一 定價 五拾錢

●江村秀山師講述 瀉仰要路 冊一 定價 六錢

●高田道見師講述 十玄談 冊一 定價 六錢

●大內青樹居士講述 般若心經 冊一 定價 十四錢

●佛說法滅盡經 冊一 定價 二錢

●齊藤雅信師講述 俱舍宗大意 冊一 定價 四十五錢

●三十唯識論 冊一 定價 四錢

